

ふるさと 霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第131号 (2017年4月)

風に吹かれて (109)

白井啓治

・やつとこ巣籠から蜥蜴等目覚め出る

この春は桜の花も随分と遅れて咲いた。寒暖の差があまりに大きな春への移ろいであった所為で、花も動物も活動始めのタイミングを計りかねているようである。

陽氣が不安定な年は、人間社会の動向も不安定になるのだろうか。世界の政治が何所へ向いて進もうとしているのか理解に苦しむ。独りよがりな主張する愚かと言える政治家が、我が国だけではなく世界に蔓延しつつある状況は、自然界のバランス作用を無視しての人口増加を是正するために、大規模な殺戮行動を自然界が促しているかのようにも思えてならない。もしかしたら神のような存在があつて、驕り・高ぶりが蔓延した人類に対する粛清が始まったのかも知れない。

進化の極大化してきた生物は自然に淘汰される、と何かに読んだことがある。人類にも今それがやってくるのかも知れない。生物には、何かの危機が訪れた時、パニックで自滅を防ぐ為に、ちよつと立ち止まり深呼吸して、軌道修正が出来る能力を持つている筈なのであるが、一息深呼吸しても規正能力が働かなくなつて来ているのかも知れない。

い。だとすれば、これはもう滅亡しかない。

テレビのニュースで、もうどうしようもない政治と逸脱した大臣の言動を見ているうちに、前にも紹介したことがある羽仁五郎の言葉が思い浮かんだ。

『自分の国だから我々は日本を批判するのだ。批判するのはよりよい日本をつくるためなのだ。批判の無いところには未来はない。無批判に日本の良さなどというのはナルシズムだ。鏡の中の自分の顔をながめていい気分になっているような馬鹿と同じだ』

国会や地方議会の様をみると、もう言葉すること批判することも嫌になつてくるが、この羽仁五郎の言葉は、自分が天に唾するかのように身に突き刺さってくる。皆が他責ばかりを口にするのではなく、全ては自責の考えに立ち、意見を言うなり行動をとるなりしなければ、滅ぶしかないだろう。

春の陽だまりに、こんな言葉を思っていたら、天空に雲雀の声が鳴き、脈絡なく坂口安吾の『人間は生き、人間は墮ちる』の言葉が思い浮かんだ。更によつたことに、無門関の「出得するも出得せざるも、かれもわれも自由なり、神頭は鬼面と共にならび、敗闕も当に風流なり」の言葉が思い出されてしまった。こうなればもうやけっぱちに

ではないが「とかく浮世は色と酒。ささ飲んだり悪縁因縁」を口ずさむしかあるまい。

さて、当ふるさと風の会も、この五月で満十一年となる。ふるさと風の会は、月刊紙「ふるさと風」と朗読と手話舞の劇団「ことば座」を柱に、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を基軸に活動を展開してきた。

また、当会の分科会として「兼平智恵子のことば絵教室」の活動もある。更に当会とは直接関係はないが、伊東弓子を代表とする「玉里御留川を考える会」とも歩調を一にして活動を展開している。

ふるさと風の会十一周年行事として、今年は「ふれあいの里石岡・ひまわりの館」にて6月11日(日曜日)に、「ふるさと風の会10+1年祭」を開催することとなった。

10+1年祭では、月刊「ふるさと風」の活動実績としての「ふるさと風のバックナンバーと文庫の展示」をはじめ、「ことば絵教室展」、「御留川資料展」「ことば座公演」を開催します。また、計画中ですが「ふるさととは、物語の降る里」をテーマとしたフリートークキング会などを行いたいと考えています。

ことば座の公演では、活動初期に立ち返り、行方市在住のオカリナ奏者、野口喜広氏を招き、小生の作詞、野口氏の作曲による「なは愛しきもの」をモチーフとして、同名の「なは愛しきもの」を、手話舞の小林幸枝の舞を組み入れた朗読劇「常世の国の恋物語第37話」としてお届けします。

(※ことば座公演のみ有料となります。)

サルに戻れ!!とまでは言わないけれど:

菅原茂美

マスコミや科学専門誌等で、文明の進化速度を、サルの時代にまで戻せ!!との論評を、私は見た事がない。時代錯誤と、叩かれるのが怖いのか?誰も騒がないという事は、それほど重要な案件ではないと言う事か?

しかし世の中は、騒がないから問題がない...という事にはならない。私が今、重大案件だと言いたいのは、一般世論(国の舵取り)は、高度経済成長を強く望むが、私は真逆で、無理な背伸びは怪我に通じると言いたい。即ち文明進化の速度が「拙速過ぎる」ため、問題が多発していると思う。例え速いとしても、地球環境を汚染しなければ、それでよいのだが、機械文明発展のリスクが、あまりにも大き過ぎるから、黙っていられなくなる。

例えば鋼鉄1ト生産するのに石炭の燃えカス、排ガス、不純物など、環境を汚染する廃棄物が、どれだけでる事やら...更に消費する水や電力、運搬費用など多大のエネルギーを使う。文明の進歩は、人類生存に最小限必要な機械文明の発展でいいのではないか。何を焦って、産業の急拡大を、無理に推進し続けるのか。

もともとスローで良い。アマゾンやボルネオなどで、未だに石器時代さながらの生活をしている裸族など、決して不倖せとは言えまい。先進国で、成果主義に追いまくられ、過労死にまで追いやられているサラリーマンの法が、遥かに不幸だろう。

*

地球の人口収容能力は50億人といわれる。しか

し既に73億人を突破している。毎年8500万人ずつ増えているので、今世紀半ばには確実に100億人を突破しそうだ。人口が増えれば、それだけ消費が増加し、環境は汚染し、資源は枯渇する。

風が吹けば、桶屋が儲かる方式で言うなら、人口が増えれば戦争が絶えない...という事になる。すると、「種の絶滅」リストに「人類」の字が加わりそうだ。それなのに各国首脳は、目前の利益追及に汲々とし、「国益第一」の亡霊に追いまわされ、いずこの国も右往左往の狼狽ぶり。

自動車でなくとも、馬車でゆっくり田園風景を満喫しながら...いやもつと遡って銅器も鉄器もいない。せいぜい石器ぐらいで、チンパンジーよりチョイ増しな文明開化でよろしい...とまでは言わないが、環境を汚染し、資源が枯渇するまで略奪し、再生不能なまでに母なる地球を痛めつける無謀は、サピエンス(智慧ある人)といわれているのだから、いい加減この辺で目を覚まし、猛省が必要だ。

この日本列島には、縄文人が10万人ほど生活していた。現在の日本人の1000分の1である。狩猟採集生活で、人口密度は極めて薄く、争いも少なかったであろう。ところが紀元前5世紀頃、大陸から弥生人(たぶん戦争難民)が大挙100万人も、一気に押し寄せてきた。人口の差が大きいから、当然縄文人は、この弥生人に婚血吸収され、日本列島の主体となった。そしてある考古学者が縄文人骨40体を発掘調査したところ、戦いによる傷跡など全くなかったが、弥生人骨200体には断首やら金属による傷痕が多数見つかったという。なお縄文人には全くなかった結核によるカリエス痕が、弥生人には多数存在していたという。このような

経過からも金属兵器は正に凶器であり、多くの災いを残したといえる。機械文明の進化は、遅ければ遅いほど良い。

*

さて環境汚染の問題だが、現在、海の底は分解しにくいプラスチックや化学繊維の微細な堆積物により覆われ、プランクトンなど正常な繁栄がしづらくなっているという。更に加えて、温暖化現象や、それに伴う海流の異変などで、沖縄などでは、サンゴの白化が急増しているという。

そういう事が分かっていながら、産業拡大など、なおも国家を無謀操縦する為政者からは、早速、操縦の免許証を剥奪すべきである。いやその前に、そういう衆愚院議員を国会へ送り込んだ国民は、座禅でも組んで、しみじみ反省した方が良い。

世界は何を焦って、産業発展の過当競争に奔走しているのか?まるで気が狂ったように、何もかにも独り占めしようとする動きがアチコチで見える。特に20世紀以降において、発明・発見の先着争いに、血みどろの戦い。競争原理は、資本主義の基本かも知れないが、後れを取れば、高い特許料を払うか、偽物造りで生き残るしか方法はない。

現在、世界中から、革製品や衣料品、食品など、偽物がワンサと日本に侵入してきているという。その92%は中国からだという。その他、知的財産の盗用も数限りなし...との事。

何しろ日本は、インドネシアでの新幹線入札で、中国に負けてしまった。日本より遥かに安い価格で、しかも新幹線は中国で開発したものである...とか平気でのたまう。北極海の海底に中国国旗を建て、更に月の鉱物資源採掘権を先取するため、

宇宙開発に余念がない。笑止千万だが、ミツキーマウスに似たネズミは、昔から中国にいたとか、松坂牛・青森りんご・コシヒカリなどは中国で意匠登録とか。

人類が平等に生き抜くために、ある程度のマネゴトなど、寛容の精神で見過ごしても……とも思うが、知的財産権の侵害など、あまり露骨だと国際秩序が維持できず、世界から除け者にされますぞ。

生物の体の構造や行動は、全てその設計図である「DNA」に書き込まれている。そしてDNAには、永遠に生き続けたい……という強固な「意志」が存在するように見受けられる。現在の全ての生物は40億年間、そのDNAの意志に完全に支配されて生きてきた。時により「利己的」に、時により自己犠牲による「利他的」に、生命の継続を成し遂げてきた。その尊い「連続性」を、戦争や機械文明という近視眼的欲望で、現代人が自ら断ち切る「愚」は、何が何でも避けなければならない。

*

人類はメソポタミヤで、ほぼ1万年前、狩猟採集の遊走生活から、農耕牧畜の定住生活を始めた。その時点を開明の発祥と仮定するなら、生命の歴史40億年に対し、人類の文明獲得後の年数は、わずかに40億分の1にしか過ぎない。そんな短時間で生命が歩んだ地球上の尊い環境を、簡単にぶち壊しては、なんにもならない。特に1万年の内の最後、産業革命から僅か250年ほどで、宇宙にまで飛び立ち、他の惑星に侵入しようとする態度は、あまりにも不遜な振る舞いといえる。白人が、オーストラリアや南北米大陸の先住民を凌駕して、侵略した過去の反省が一つも生かされていない……。地球上の生物は、多種多様に進化した。中でも、

霊長類は体重に比し、脳がかなり重い。特に人類という動物が、脳ミソを異常に膨らまし、道具を造り、言葉を使い、急速に文明を開化した。その活動が、他種生物を絶滅の危険に晒さないなら、文句を言わない。しかしその逆で、人類だけが繁栄すればそれでよいとする態度には、絶対賛成しかねる。しかも、この母なる地球を脱出してまで、他の惑星に進出しようとする野心は、無謀と言うほかない。

そこまで言うとは、科学の進歩に水を差すのか？ 宇宙へ飛び立つ夢と希望をそぎ取るのか？ と怒られそうだが、よく考えてほしい。この天の川銀河だけでも、生物が生存できそうな惑星は、100万個はあると推測されている。それだけあるのなら、この地球より1千万年や1億年ぐらい先行する文明を持つ惑星はワンサとあるはず。それにもかかわらず、先進文明の惑星から、これまでに地球に侵略のため宇宙人が攻めてきた歴史は存在しない。UFOなどは単なるフィクションで、SF作家の戯言（せれご）に過ぎない。という事は、宇宙を旅するほどの機械文明が発達した惑星には、当然、他を侵略するなどの低俗な発想は生まれてこない。もし成熟した文明を持つ惑星があったとしたら、科学の進歩と倫理教育は、同時進行しているに違いない。それゆえ、他の惑星を侵略するなどの発想は、この地球人へのみ思ひ浮かぶ、軽薄で不道德な妄想に過ぎないと言いたい。

*

宇宙人が、この地球を攻めて来るかどうかについて、もっと具体的に分析してみよう。太陽に、最も近い恒星（プロキシマ・ケンタウリ。⁴¹光年）の惑星に、もし、宇宙人が存在し、武器を積んで地球を

攻めて来るとしたら、マツハ50で飛んでも、76400年もかかる。マツハ50の根拠は、その恒星が仮に、わが太陽と同じぐらいの質量と考えた場合の、脱出速度である。どのような船団を組むか知らないが、7万6千年もかけて、多数の戦闘員をどうやって運ぶか。船団の中で世代交代を重ね、地球に到達する頃の子孫は、地球並みに1代25歳と仮定すれば、3056代目である。乗組員の数は、地球の常識を当てはめれば、近親交配の害を除くために、男女250人ずつ計500人は最低限必要である。

尤も異星での生物を、男女だとか、人の一生を、80年だとか、地球の概念から飛び出せない発想は、貧弱である。単性生殖なら男女は要らぬ。その生物の一生は1万年だって、或いは「不死」だってあるかもしれない。乗組員は凍結睡眠状態なら、世代交代は不要。船団の運行速度だって、より光速に近いテクノロジーが、発達しているかもしれない。

SF的空想の展開もまた楽しいが、いずれにしても、地球誕生以来、系外惑星から宇宙人がやって来た証拠は何もないので、そんな事は無かったと断言しても過言ではなからう。

結論として、それほど機械文明が栄えた星なら併せて「道徳」も進化しているはずなので、こんな地球などに攻めて来るわけがない。そんな話は、SF作家の戯れに過ぎない。

それゆえ今回、私が言いたいのは、人類の頭脳の発達をもっとスローであってほしかった。文明の発達速度は、もっとゆっくりで良かったという事。

なにも、シーラカンス（5億年余も姿形を変えず）ほ

どゆつくりとか、チンパンジーほどのスローペースで進化するべきだったと言っているのではない。もう少し、石器時代的な、或いは土器時代的な生活で、穏やかでのんびりした時代を満喫できたら、今日のような戦々恐々の、残酷な時代を経験せずに済んだものを：と残念に思われる。

人間同士で殺し合いをする過ちは、金属製の冷酷な兵器を発明したからだと言いたい。

＊

700 万年前、直立二足歩行開始をもって、人類の発祥と仮定し、約1万年前、定住して農耕牧畜開始をもって文明の発祥と仮定する。そして250 年ほど前の産業革命をもって、近代機械文明の発祥と仮定するなら、あまりにも文明の発達は、急速過ぎた。そして医療や食糧事情が急速に改善してくると、最も恐れていた「人口過剰」現象が見られるようになった。知恵ある動物なら、なぜその辺をコントロールできないのか。狼はエサが少なければ子を産まない。

愚かな人類は、食糧があるうがなろうが、むやみやたらに子作りに励む。過剰増殖の結果は、最も忌まわしき「戦争多発」につながる。

無制限増殖する生物は、必ず恐るべき『絶滅』に直結する。知恵ある動物なら、その辺を何とかして克服しない事には、ただの愚かな、野生生物の一種に過ぎなくなる。小さな島で、草を全て食べ尽くし、大群で海に飛び込み、集団自殺するバツタの群と同じである。これだけ科学が進化した時代に生きているのだから、もっと理性を働かし、ユートピアとまではいかなくとも、平和で安定した時代に、軟着陸したいものである。

＊

さて、これまで終始一貫して述べまくってきた事でもあり、更に今回も、念を押して繰り返すが、環境を荒らし、資源を枯渇させた向こう見ずの機械文明の発達を、私は「偽文明」と呼びたい。そして異常拡大した人類の脳は、余りにもはしたない行為が多かったので、私は「毒饅頭」と呼んでいる。

ヒトの脳神経細胞数は860 億個。こんなにも多い脳細胞が、生存のための「欲」を突っ張って、小競り合いから巨大戦争まで演出し、汲々として生きている。21 世紀になっても、世界平和の構築について、これといった進歩がさっぱり見られない。それテロだ、内乱だと未熟世界の繰り返し。20 世紀は、世界大戦を2 回も繰り返した。

そのため人類の倫理的レベルをもっと向上させるためには、個々の利己主義を抑え、機械文明の発展速度を緩やかに進めるべきだ。そして生活のレベルをもっと節約し、アイヌのように、自然に感謝して、敬虔な態度で生きるべきだ。そうすれば、たとえ狂気じみた権力者が現れ、世界を睥睨しようとしても、周囲の良識が、すぐ原爆投下のボタンを押すような愚行を許す事はないであろう。これまでに米国は、人類史上二大悪事の「原爆投下」と「枯葉剤（ダイオキシン）投下」をやつてのけた。ノーベル賞を受けた世界最高級科学者が多数関与したはずだが政府の悪事を阻止できなかった。

私の「ひがみ」かもしれないが、対戦国が、有色人種なるがゆえにアメリカは、あの2 大悪事を決行したのだと思えてならない。その証拠に第2 次大戦で、あれほど世界に恐怖を与えたドイツに対し、原爆投下をしなかった（*1）のを見れば、

有色人種蔑視の根本原理が働いたと、強い疑念が浮かぶ。そんなアメリカではあるが、世界の首脳がしつかり、スクラムを組めば、たとえ狂気じみた首領がどんな政権運営を図ろうとも、こんな突然変異の「でたら芽」を摘む事ができるだろう。

【*1】19 世紀の後半頃から、欧米諸国には、黄色人種の台頭を懸念する「黄禍論」が唱えられ、一方、日本では、アジア諸民族の連帯を説く「アジア主義」が主張されたという。そんな諸々が絡み、1939 年ドイツのポーランド侵入に始まり、45 年日本の敗戦までの第二次世界大戦は、61 か国が参戦し、民間人3000 万人、軍人2500 万人、計5500 万人が死亡するという人類史上最大の戦争であった。敗戦した日独伊3 国の枢軸国のうち、原爆投下を受けたのは日本のみであった。そして枯葉剤を撒かれたベトナムでは今でも後遺症多発。】

21 世紀の我々は、まず戦争ばかりの過去の愚かな歴史をしつかり反省する事だ。そして、人口をコントロールし、格差から生じる争いを防ぐノウハウを、試行錯誤を重ねながら確立して世界平和を構築しなければならない。現在の全人類は、7 万年前、アフリカから脱出した、ほんのわずかの黒人集団の子孫である事を肝に銘じ、全人類は非常に血縁の深い親戚同士である事をもう一度頭に叩き込む事だ。それを納得できれば、人種による差別など、全く、ナンセンスである事がしみじみ分かる。そうすれば、すべての人々に、心地よい牧歌的な生活が展開するであろう。

＊

我々サピエンスの兄貴分にあたるネアンデルタール人の「種の寿命」は27 万年であった。弟も同

じと考えると、あと7万年しか残っていない。しかし、世界中の全ての人々が、今日のような消費水準で生活したら、残り1万年だって危ういという学者もいる。環境汚染と資源の枯渇がその理由である。あまりにも短絡的で利那主義の生活を続け、更に、意地の張り合いで、大量破壊兵器の発射ボタンを、いつ誰が押すか見当もつかない。こんな事では全地球的平和は、遥か夢の彼方で、40億年も続いた命の鎖を、自ら断ち切る「愚」は、何が何でも阻止しなければならない。

地域に眠る埋もれた歴史(25) 木村 進

高浜地区(2)

5、高浜金刀比羅神社

素十の句碑のある観音堂の一つ手前の苔むした石段を上ったところに「金刀比羅神社」がある。通りから横道に入ると、右側に「大杉神社」左側に「金刀比羅神社」と書かれた石柱が建っている。少し進むと左右に灯籠が置かれ、左側の脚部に「船手中」と赤色で彫りこまれていた。恐らく明治まで栄えていた高瀬舟や多くの船主たちの信心を集めていたのだらうと思います。上り階段は最近整備されたものでしょう。階段の両側には竹林が広がります。上った先には木造の「金刀比羅殿」のお堂が置かれています。少し粗末な感じです。

6、醸造所と赤レンガ

高浜に残っている赤レンガの建造物を紹介します。高浜は、江戸から明治期にかけては霞ヶ浦の海運業でかなりののにぎわいがあったようで大変興味がわきます。昔は、今の高浜からは想像もつかない繁栄ぶりだったようです。

石岡と同じようにやはり醸造も盛んで、醤油に酒造りはかなりの賑わいを見せていました。

明治の中期の鉄道が開通するまでのにぎわいと、その後の衰退ぶりがありにも極端です。

爪書き阿弥陀堂前を少し東に行つたところに「こがね味噌」のお店があり、そこを少し行くと通りの左手にレンガの煙突が残っています。

ここは、高浜村の醤油醸造所(羽成卯兵衛醸造所)として大きな工場があったようです。高浜の醸造所として調べるとこの羽成さんと「広瀬慶之助醸造」「白菊酒造」「笹目八郎兵衛醸造」などの名前が出てきます。この煙突は趣がありますね。是非積極的に遺産として登録して残していただきたいものです。羽成醸造所の赤レンガ塀も一部が残っています。石岡の赤レンガと同じですね。大々的に醤油を製造していたのですが、皆廃れてしまいました。しかし、これこそ「アイビースクエア」でしょうか。この遺産に霞ヶ浦の美味しい食べ物などをセットしてみたいですね。味噌に酒は美味しいのがあります。しかし、これらの残された建造物は努力をして残さないとダメになってしま

います。東日本大震災の地震により門などにはかなりヒビが入ってしまいました。残念です。羽成卯兵衛さんは、醤油の醸造で財をなしましたが、対岸の関川地区にある「八木干拓」の事業にかなりの私財をなげうってしまったようです。

明治時代は石岡も高浜も「醸造の町」として有名だったはずですが、今の石岡には特に見るべきものは無いのでしょうか？少なくとも現状で残っている設備や建物を記録登録して残すことに力を入れてほしいと思います。

7、高浜の街並み

爪書き阿弥陀堂の裏山からの高浜の街並みが見事にながめることができます。お堂の右手後ろの階段を上ります。この上は墓地ですが、ここからの眺めはとても素晴らしいです。霞ヶ浦のここ高浜の入り江が一望できます。



すぐ隣に白菊酒造（合資会社廣瀬商店）の煙突が見下ろせます。白菊酒造の創業は200年以上前の文化2年（1805年）といえます。お酒「白菊」は生酒など茨城県内では比較的良く売られています。

「霞ヶ浦の荒れた地を田圃に変え、そこに無農薬のコメを栽培し、それをお酒にしたい」という無農薬のお米づくりなども進めています。また、メイン通りを歩いていると、ひときわ目に付く「こがね味噌」という看板が目に見え込んできます。お店は「小倉味噌」さんです。

石岡・高浜地方の醤油醸造は、土浦にわずかに遅れて、高浜で大規模な回船問屋をしていた今泉新吉氏が享保年間（1716～1735年）に始めたのが最初だと言われています。石岡・高浜の醤油はその後水戸藩に販路を拡大していき、明治中期には一大醸造の街となりましたが、国産大豆が競争力を失うとともに姿を消していきました。

この時の味噌造りが受け継がれ、大正7年に「小倉味噌」を創業し、国産大豆、国産米を使い、昔ながらの製法による“手づくり味噌”をモットーに営業しています。

また、石岡の工芸品として知られたものとして「府中杉細工」があります。ここ石岡（府中）は昔からの酒どころで、杉を使った酒樽や味噌樽造りが盛んであり、そのため杉細工も昔から行われてきました。現在はここ高浜の福田さんが約50年に亘って独特の焼き杉で民芸品を制作しています。

（茨城県の郷土工芸品として認定）

福田工房（合）工芸物産）は高浜の小倉味噌さんから川の方（南）に少し入ったところに工房があります。商品は市内の土産物店やイベント会場、東京のデパートなどで展示販売されています。

8、高瀬舟

利根川の東遷事業により霞ヶ浦から利根川、江戸川を通じて安全に江戸に物資を運ぶことができるようになりました。江戸時代前から川で主に荷物を運搬するために、舟の底を平らにした高瀬舟（高瀬Ⅱ浅瀬）が全国各地の川で使われました。高瀬舟ってどんなものだったのでしょうか。

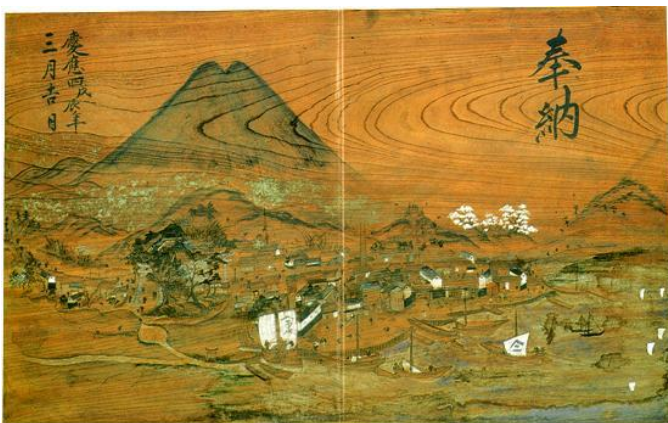
森鷗外の「高瀬舟」は京都から大阪へ流れる高瀬川を行き来する小舟であり、こちらの荷物運搬も同じような小舟が多かったのでしょうか。小説では罪人を運んだという京都から大阪の高瀬川の舟は現地で再現展示されています。あまり大きなものではなく、米なら20～30俵くらい運んだのでしょうか。これには帆がありませんが、霞ヶ浦で使われていた高瀬舟は帆を張って操行したようです。小舟にとっては潮の流れがなく、風があれば帆は、なければ櫓をこぎ。または川の沿岸からロープで曳き舟などもあったようです。

慶応4年に高浜神社に奉納された一枚の額絵があります。そしてそこには神社の説明や常陸風土記に歌われた時の高浜の様子が説明されているだけで、絵の説明はありません。この絵の説明は、

この神社ではなく「高浜公民館」の前に「高浜河岸の繁栄」という看板に書かれています。

これによると、江戸に運んだものは「米・麦・大豆・小豆・薪炭・醤油・木材など」で江戸から運ばれたものは「塩・干鰯・砂糖・ロウソク、呉服・荒物・小間物など」と書かれています。

この中では塩がとても気になりますが、これは醤油の材料として「赤穂塩」が使われたようです。京都の方の高瀬舟は川幅もせまく、場所によっては、陸からロープで曳き舟などしたようですが、霞ヶ浦は広く潮の流れもあまりないので、風があれば帆をはり、なければ櫓をこいだのでしょうか。絵にもたくさん帆を張った舟が描かれています。



慶応四年高浜神社奉納 高浜（高浜神社内蔵）

ここに書かれた絵も帆が見えますが、鮮明でないで、「石岡の歴史」に掲載されている写真を載せています。

この大きくそびえる山は筑波山です。

湖側と反対側に大きな神社の鳥居が見えます。

また湖の岸辺には小さな鳥居があります。帆を張った舟と帆をおろしてマストのついた舟が数隻見えます。全部で舟は10隻以上描かれています。かなり賑やかだったと思われます。



この絵が奉納されたのは慶応4年の3月です。

明治元年は同じ年の9月でした。また、大政奉還
は前年の慶応3年。戊辰戦争がはじまったのは、
この慶応4年です。こののどかな景色・風景と当
時の動きとがうまく頭の中で整理できません。山
岡鉄舟の活躍した時代と同じなのですから。この
山岡鉄舟の兄（小野古風）は、高浜小学校（私塾

からスタート）の創始者で、初代校長でした。

9、蒸気船

さて、霞ヶ浦の高瀬舟のことを書いたのですが、調べてみるとかなり大きなものが多く就航していたようです。「いしおか100物語」によると、その積載量の規模は

○高瀬船

・霞ヶ浦 900～1200 俵（利根川下流域まで）

1 船に船頭と水主5～6人。北浦も含む）

・中利根川 300～550 俵

・鬼怒川 250～500 俵

・那珂川 500～600 俵

○平田船 300～500 俵

○茶船 60～100 俵

○川下小船 25 俵

また、明治期には外輪蒸気船が就航します。まさに人と荷物を運ぶ足として、霞ヶ浦周辺の町を結ぶ航路として運行されていたのです。

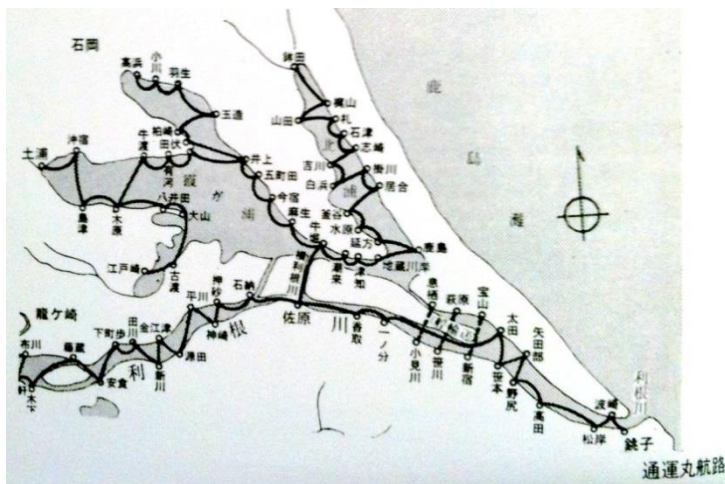
煙突から煙を吐きながら霞ヶ浦を行ったり来たりしていた様子が目に浮かぶようです。これは戦前まで運行されていたようですので、お年寄りの方は見ておられる人も多いと思います。

参考までにこの航路図がある方のブログよりお借りします。さて、これによるとたくさんの船着き場があったようです。

高浜・小川・羽生・玉造・柏崎・田伏・井上・五

反田・今宿・麻生・牛堀・佐原・・・いろいろなルートがあったようです。

それにしても、この高浜から霞ヶ浦沿いを東に行く道は鹿島鉄道が通っていた道です。船がなく、鉄道がなくなり、お互いを有機的に結びつける強いきずがなくなってきました。



石岡の歴史を紐解いていますが、これも昔からの物や文化の流れがあってこそ成り立っています。是非その流れを断ち切らないように、お互いお互いの立場や歴史的な流れを知り、お互いの文化を大切にしていく交流が大切だと感じました。

高浜に残る昔の河岸には廻船問屋の名残を残す建物。もうほとんど残っていません。廻船問屋は江戸との荷を運ぶために多くの高瀬舟などを擁し、一時はかなりの数の問屋が集まっていた。中でも篠目八郎兵衛と今泉氏がよく知られています。篠目八郎兵衛は千葉県銚子の海鹿島に別荘を所有して文人たちをここに招待して活動していました。大正時代末期に小川芋銭がこの別荘（潮光庵）で暮らしたことはよく知られています。（高浜・完）

ニッポン音楽の話⑧

植民地主義音楽と民族音楽

木下明男

今から50年前、労音と言う音楽運動に身を投じた頃のお話です。品川区の大企業に入社した頃、60年安保で団結力を身につけた労働者は、職場の隅々まで明るく諸要求を実現できる職場になっていました。諸々のサークル活動が盛んで、私も其の頃、先輩から誘われ労音の活動に…。

組合弱体化のため、新賃金制度（会社職制の強化）導入が計られ、組合の分裂策動が行われました。会社側の組合分裂策動により、人間関係や様々な愛憎を経験した私は、社会のあり方に興味を持ち始めました。そんな折り、サークルの代表として、労音の地域活動に参加するようになりました。北海道函館労音との交流会に参加したのもこの頃で、生涯をかけて音楽運動に参加するきっかけにもなりました。

そして、何のために音楽運動を進めるのかの勉強が始まります！そんな時に学んだテキストから…。

・独立を失った日本

太平洋戦争の敗戦によって、日本の歴史に、かつてない新しい状態が生まれました。日本は独立

を失い主権を侵された国になりました。当時、沖縄・小笠原は完全にアメリカに占領され、沖縄の日本人同胞はアメリカ政府の支配を受けています。国内には200に近いアメリカの軍事基地があつて、其処には日本の主権は及びません。今の日本は政治的に、経済的に、軍事的に、文化的に、アメリカに従属しています。こんな屈辱的条件は過去に一度も日本の歴史に起きた事はありません。

日本政府が連合国軍に無条件降伏したとき、それは「ポツダム宣言」を無条件で受け入れるという事でした。日本軍国主義が打倒され、日本が民主化したら、連合国軍は直ちに日本から立ち去らなければならぬと、「ポツダム宣言」に明記してあります。その「ポツダム宣言」を日本に押し付けた連合国の一つであるアメリカ自身が、何故、その「ポツダム宣言」を踏みにじって日本を半ば占領するような非道な事をやったか？むろん、それは原始兵器の力を頼りに、全世界に侵略の矛を進めている、アメリカ帝国主義の欲望・政策・方針を強引に日本に押し付けたものです。しかしそれを全面的に受け入れ、一面的な「サンフランシスコ平和条約」と軍事的な「日米安保条約」の二つの条約を中心に日本をアメリカ帝国主義の鎖に縛り付けるよう、全力を上げて努力した、日本独占資本を中心とする反動勢力が国内にいなかったら、このような日本民族最大の不幸は生まれなかった。アメリカ帝国主義と日本独占資本、日本人の二つの敵に対して、私たちが限りなき怒りを抱くのは、このためです。

日本独占資本は、敗戦で日本を支配する力を失うと、アメリカ帝国主義の力を借りて日本支配を続けるために、日本人の生活と権利と自由をア

メリカ帝国主義に売り渡した。それまで、彼らは、あの極反動の絶対主義的天皇制を支える、代表的な排外国粹主義者でした。それが、どうして、手のうらを返すように、自国民を外国の戦争屋売り渡しす売国勢力に早変わりしたか？それは不思議でも何でもありません。

ソ連のカフカースにグルジア（ジョージア）という民族があります。スターリンの生まれた所で、元は独立国でしたが、19世紀にツァーリ・ロシアに併呑された。すると、極端な国粹主義者だったグルジアの支配者たちは、一度にツァーリに忠実な売国勢力になり下がった。ドイツのナチも、日本の天皇主義者にひけを取らない、極反動の国粹主義者だった。それが、今は、最もアメリカ帝国主義に忠実な売国勢力に早変わりしています。古今東西、反動勢力や独占資本は、そういう本質を持っている。人民支配のためには、どんなことでもします、そして、今の日本のすべての文化、音楽に実に大きな影響を与えている。

・植民地主義音楽

前に述べた通り、日本の天皇制は二つの矛盾した要素を持っていた。一つは、その封建的な基礎から生まれる、極端な排外国粹主義、もう一つは、其の資本主義要素から生まれる、極端な外国崇拜です。ところが、敗戦で天皇制の基礎だった封建的要素が大きく崩れ、天皇は神から人間になり、主権を天皇から人民の手に移す新しい憲法が作られ、封建的な土地制度も、家族制度も大きく変わった。国粹主義の社会的基礎が大きく崩れ、外国崇拜の基礎だけが残る。こちらの方は、アメリカへの新しい従属により、益々大きくなる条件を持

つ。

アメリカ帝国主義は、日本を目下の資本主義国として育て、アジア侵略の最も重要な強力者にするようとする方針を、一貫して持っている。日本独占資本も、これまで、最も忠実にこの方針に従っている。それで、この二つの反動勢力にとって、一番恐ろしいのは、日本人の中に民族的自覚と階級的自覚の高まることです。何とかしてそれを押さえつけなければ、今のようなアメリカによる日本の半ば占領の状態をいつまでも続ける訳にはいきません。

こうして、テレビ、ラジオ、文学、映画、演劇、音楽、舞踊、美術、その他、一切の文化に、アメリカの極端に退廃的な文化が怒濤の様に流れ込んできました。いうまでもなく、これらは、すべて、日本人の民族的自覚と階級的自覚を眠り込ませ、その思想や考え方をいつまでも植民地的な状態に置こうとするものです。つまり、植民地主義の文化です。この害毒は、日本音楽の場合、特別に大きかったです。あの退廃的な植民地主義音楽がどんなに大きく日本音楽全体を害したか、詳しく説明することはしない。1936年、アメリカ政府は、「コンロン報告」というものを取り上げ、それを日本に対する文化方針としました。その中で、「日米安保条約を続けるに必要な組織的・文化的・政治的基礎を支えるためには、外交その他の公式の機関だけでは足りなくて、縦に深く日本国民の中に入り込み、アメリカへの信頼を植え付けなくてはならない。そのために、野球と大衆音楽は特別に重要な役割をする。」と言っています。

・民族音楽

こうして否応なしに、日本人の間で、民族の問題が新しい意義を持って取り上げられ、独立・平和・民主・生活向上が戦いの中心目標となり、労働者階級がその先頭に立ちました。あの偉大な安保反対の大闘争はその代表的なもので、それから、日本人のすべての戦いが益々革命的な性格を帯びるようになりました。

同じように、音楽の面では、やはり、労働者階級の指導の下に、大多数の勤労人民が植民地主義の音楽侵略に反対して、民族的、民主的、大衆的な日本音楽建設のために、立ち上がりました。労音、うたごえ、わらび座、その他の民主的な文化団体は、そういう戦いを育てる母体として、極めて重要な役割を果たしました。そうして、民主的な音楽家の手で、多くの革命的な作品が作り出されただけでなく、勤労者の中からも、多くのすぐれた作品が生まれました。こうして日本の勤労者の民主的な音楽運動は、当面する日本の民族民主革命運動の一翼として、重要な地位を占めると同時に、新しい日本民族音楽の生まれる、大きな道を開きました。いうまでもなく、これは、非常に骨の折れる、また、長い時間のかかる仕事です。しかし、一度こうして力強く流れだした清流は、どんな力も押し止める事が出来ないでしょう。益々大きく強く成長して、次第に、あの退廃的な汚らしい植民地主義の音楽を国内から追い出し、日本民族の伝統を正しく受け継ぎながら、国際的なすべての音楽の長所から学んで、真の日本民族音楽を建設していくに違いありません。そうして、それによって全人類の音楽を高め豊かにしていくという、大事な民族的任務を果たしていくに違いありません。

大場家と北の津頭宅を訪問し

講演会に参加しよう

伊東弓子

今回は、玉造、浜の二ヶ所を廻ること、昼食を済ませコスモスでの講演会参加という計画で一日掛りとなった。日程の組み方、道順の流れと工夫が必要だった。特に集合場所は、尋ねる両家が地域の町中であって分かり難い為、頭を捻った。時間の関係上、玉造・浜の名所は次回にすることにした。旧跡も両家の繁栄や地域の人々の生活から造り上げられたものだろうから、見逃してはいけないと思うので欠かすことは出来ない。次回のコースに必ず入れよう。

玉造村と浜村一里と離れていない所に、片や長い歴史を刻む流れ海で漁をしてきた四十八津の人達の総元締め北の津頭、串引家と、片や戦国時代を乗り越え、江戸時代水戸藩玉造郷、小川郷、玉里郷の大山守とし勤めてきた大場家、共に豊かなこの地で力を出し合ってきたのだろう。交流の場も大いに盛んであったろうと偲ばれる。海彦の物語を連想しながらの楽しい出発となった。

集合は二ヶ所に分けた。大場家を知っている人は直接行ってもらう。分からない人は355号添い、浜の台ドライブインに寄ってもらい、私が先頭で向かった。順調にいったよかったです。

三十年位前だった、駐車場は狭く、枳殻の垣根があった。黄色というより本当に金色の実を初めて見た日の感動は忘れられない。あの時も先生と友達何人かと一緒だった。先生は必要な所へは必ず連れて行ってくれたのだと後で深く思った。歌詞のように「まろいまるい金の玉だよ」あの「まろいまるい」の表現が素晴らしい。

案内は田口さんだった。展示場内の文書、書、絵図を分かり易く、丁寧に、優しい響きの説明でしてくれた。先生の意志を大切にして私達へ伝えてくれていると有難く思った。軒下に干柿が下がっていた。大根も干してあった。その香りが遠い日の下働きをしていただろう人の影を写してくれた。師走の日向でお茶を頂いた。

台所への入り口から小池さんの絵が目に入った。古い土間の一部に映えて、陽ざしと共に心を癒してくれた。この絵も先生の心の優しさからで、この建物の時の流れを表してくれている。この地域の歴史を記録した数多い文書の整理、雨漏りし始めた建物のこと、文化財への取り組み、襖から湧き出てきた数々の文書の整理、玉造の古文書の人達との長い年月、力を入れ込んだ日々の苦勞、そういう姿の一部始終を聞いてきた。それは今の私達に伝えてくれたものだ。池上先生の姿は玉造にも玉里にも見られなくなったが、纏め上げた資料は残っている。あの日の心や努力されたことは私達がここ玉造にきて、又玉里にあつて伝えていくものだ。去り難い思いで次へ向かった。裏山の城跡から風が吹いてきた。

玉里から浜に来るのは舟だったろうか。歩いてくる道は（今は旧道となっている）曲がり曲がっているが殆ど平らな道、山際と水辺の道だろう。山を背にして集落の家並みが続いている。車社会の今は上り降り三回、何とも思わず繰り返す、神御座す杜もどこへやら塵ばかりが集まってくる早さを競う便利さで造られているのだろう。浜のこの台は一番高い所だろう。御留川御川筋が全貌出来る。西奥に玉里の半島が筑波連峰を背に見える。霞ヶ浦の中でも素晴らしい空間の一つだろう。か

つては、この眺めを求めて広い駐車場と食堂に大勢の人が足を止めたことだろう。「ドライブイン」の文字が薄く残っている。観音さまが植え込みの中に立つておられたが、東日本大震災以来どこへ行かれたか、今お姿はない。柏崎の富士見塚古墳が左に、沖洲の三味塚古墳が右に、高浜の船塚山古墳は目の前奥にある。男の人達は食堂で黙々と、女の人達は屋外でペチャペチャと楽しそう。私はその間を行ったり来たりの日食も済んだ。

北の津頭宅へは何度か伺った。奥さんともお会いし大勢でお邪魔することも快く承してくださっていた。大家の若奥さんとして嫁いでこられ、時代の変化の中で苦勞されたとのことだが、年老いても品の良い奥さまだった。若い人が勤めなので広い屋敷内をしっかりと守っている様子が言葉の橋端に感じられた。

多少緊張したのか、覚えた筈の道を間違えてしまった。奥さんと当主の方が庭に出て待っていてくださった。挨拶のあと、石橋さんが北の津頭の役目や歴史的背景など分かり易く説明してくれた。助け船を出してくれたようでとても有難かった。奥さんも話の中に入ってきてくださった。池上先生が展示会を開いてくださった時初めて、家の歴史を知ったおもしろいことだそう。生活に追われた日々の中詳しいことも知らないままきたと仰っていた。ご主人が亡くなった後は尚のこと、ケースに入れたまま開こうとすることもなく閉じてしまっていたが、この機会に開いて見ようと喜んでおられた。南側の二階建てアパートのある辺りは、薪、炭が山積みになっていた所ようだ。船の出入りも盛んだった。また水が出て庭の法まで来たり心配も絶えなかったそうだ。先祖が堤を造った

話もあるようだ。過ぎたことにあまり関心がない当主の方も、風格のある方で、口数こそ少なかったが、尋ねた私たちへの礼を尽くしてくださった。左側の一戸建ての借家が軒を連ねている所は、昔、使用人が住んでいた家があった跡だそうだ。門の前の通りは広く市の日の賑わいは大変なものだったという。

コスモスでの講演会には、それぞれ直行してもらうようにし、会場で合うことにした。「釣瓶落しの秋の暮れ」なんか心忙しい気持ちで玉里へ向かった。時間が遅れた所為もあつて、座席に着きにくかった。前や中央は空いているが周りに座った人達が動いてくれそうもない。「ご免なさい」といって入っていきばいいのだが、それでもせず悶々としていた人が何人かいる様子だ。どこでもいいという思いで座った。始まっているのだからと往生した。折角意義ある一日を過ごして来たのに何と情けないことか。

「霞ヶ浦水運の要衝」渡辺英夫先生の、お話はよかった。関東地方が出来た歴史から始まり、茨城に止まらず東北の物資が、県北、そして霞ヶ浦へ。利根川から大消費地江戸へ物の流れにもふれたり、近世の東日本の物流のお話だった。その中の一つとして「玉里御留川」をもう一度見つめなおしてみよう。講演の後半に池上先生の名前、水戸藩玉里御留川の研究の話が加えられ、池上先生の紹介を改めて耳にした喜びは非常に大きかった。

もう一息頑張つて一周の日を迎えたい。

自了《城間清豊》（ぐすくませいほう） 2 小林幸枝

先月号に紹介した、沖縄の饗嘸の天才画家城間清豊について、もう少し知りたいと思って調べていたら、JCCの発行した資料を見つけたので、それを紹介したいと思います。

1644年、江戸に派遣された琉球王国の使節団は、琉球独自の織物や漆器とともに自了の絵を三幅持ってきた。その絵を、当時江戸の画壇を代表する絵師狩野安信に見せた。その絵を見た安信は、その筆力の素晴らしさを絶賛し「もし自了が我が国にいたら私の友としたかった」という賛辞の文をしたため使節団に渡したといひます。

狩野安信は狩野派を代表する絵師の狩野探幽の弟で、自了とは同じ歳でした。安信は天才肌の兄探幽と比較されながら、苦勞して絵を学び、当時の画壇を上り詰めた努力の絵師と言われています。安信の古今東西の絵を見、修行してきたその審美眼は鋭く、絵師の心得を記した狩野派の秘伝書「画道要訣」を残したことで知られています。

その安信が「友としたい」と記したのは、矢張り並外れた努力の末に画法を確立した自了の絵が心を打ったからといえる。

自了が、この安信の言葉を知ったらどれほど喜びを表したか。しかし、自了は使節団が帰国する直前に病死をしている。

自了程の絵師がわずか三十歳でこの世を去ったことは非常に残念なことではあるが、大きな芸術遺産を残してくれたことは沖縄にとつては大きな誇りと言える。

島津氏に敗れ、国全体が混乱していた時代、自

了の生き様や作品は、琉球の人々に大きな自信を与えるものであった。

自了が亡くなって約百年後に、自了と並んで琉球二大絵師と称される殷元良（座間味庸昌）が活躍しますが、彼も幼い頃より天才児と謳われ、時の名君尚敬王により首里城に召し入れられ、当代一の画法を身につけた。これは自了を宮中で育てた尚豊王の礼に倣ったものと言われています。

短い生涯において偉大な足跡を残した饗嘸の天才絵師、自了。沖縄の絵画史に燦然と光を輝かせています。

沖縄好きの私ですが、沖縄の歴史文化について知りたいと思っています。

県指定文化財（21）

兼平智恵子

今回ご紹介します県指定文化財は、筑波山の東方5km峰寺山（標高379m）山頂近くにある西光院（関東の清水寺と言われるように寺院は舞台懸造りで脚の高さが十一mあり、本堂は岩に張り付くように建てられている）の南西二〇〇mにある球状花崗岩です。

○球状花崗岩

天然記念物

指定 昭和一二・二・

五

西光院の駐車場より、東筑波ユートピア野猿公園沿いの南道路を約百m進むと「球状花崗岩」と記した標識があります。

標識より抜粋

露出した岩石の表面は球状の花崗岩が脈状に現

れており、球顆部分が剥離して、あばた状にくぼんでいる。球顆は長径五〜九cm、短径三〜五cmのやや扁平な球状をし小判の形に似ていることから別名「小判石」とも呼ばれている。この球状花崗岩は巾二〜三m、高さ七〜八mにわたり露出しており全国でも珍しい岩石なので県の天然記念物に指定されている。

この標識を左にして、すぎ林の山道に入る。急な斜面にある鉄製の階段を下ると露出した岩の下部が金網に覆われている。右側の岸壁の一部に剥離されたと思われる幾つかの丸いくぼみが見ることが出来ましたが、花崗岩のなかにあると言う球状のものは確認できませんでした。

この球状の内核は、黒雲母、外側は葦青石（きんせいせき）でおおわれていて、それを囲む部分は一般の花崗岩に比べると石英や白雲母が多くみられるそうで、マグマのなかに周囲の岩が砕け散ったのが成因と言われている。

葦青石はほかの地域の球状岩にはほとんど見られない、非常に珍しい鉱物だそうです。

深い山林で岸壁に陽が当たらないため、岩肌の表面はコケ類などで覆われていて球状花崗岩の判別が難しい。

昭和七年（一九三二）の茨城県史蹟名勝天然記念物の『調査報告第三輯』に「尚、本岩石の存在は古くより知られし如く、山地付近に於いては小判石として村人にも広く知られ、古くは石材として多量切り出されしものの如く、峰寺山下の三十三夜尊碑も本岩石により作られた、村人中にも之が大魂を所有せる者あり、又、山下の各間、畑地に之が転石を発見する事ありと云う。」と述べられている。

球状花崗岩はすでに七十年前から、小判形に見えるので小判石と呼ばれ珍重されていたことがわかる。尚、天然記念物に指定されているものは動物、植物、地質鉱物を問わず採取は禁止されている。

平成二十九年二月下旬に行きました時には球状花崗岩に沢水がしつとりと流れ落ち癒しているかのようにでした。

尚、つくば市にあります地質標本館にて球状花崗岩を見ることができるようです。

※参考資料 茨城の天然記念物・茨城の岩石と化石

・岩肌に染み入る平成の泉 智恵子

【風の談話室】

《特別寄稿》①

落ち穂拾い (6)

鈴木 健

・語頭 R 音について

橋本進吉は語る。「語頭音に関しては、我が国の上代には、ラ行音および濁音は用いられないという決まりがあった。古来の国語においてラ行音で始まるあらゆる語について見るに、それはすべて漢語かまたは西洋語から入ったもので、本来の日本語と考えられるものは一つもない。これは、本来我が国にはラ行音で始まる語はなかったたので、すなわち、ラ行音は語頭音としては用いられなかったたのである。」

(橋本進吉『古代国語の音韻について 他二篇』岩波文庫)

本来我が国ではラ行音は語頭音としては用いられなかったと言う。そのようなのであれば、発音習慣はアルタイ語族の特徴であるから、日本語のルーツはその方向にあることになる。本来は語頭の r 音があったが、歴史の途中から用いられなくなったのであれば、そのころから、アルタイ系の言語が日本列島の支配的言語になったことを示している。

古代語の中に、

①語頭 r 音がそのまま残っているものはないか。

②語頭から姿を消しながらも r 音のままで生き続けているものはないか。

③他の音に転化したものはないか。

もし、そのような存在が確認されれば「本来我が国にはラ行音ではじまる語」があったことになる。それは、従来の国語学の「定説」を俗説化することであり、ヤマト民族の形成に関する人類学上の成果を追認することにもなる。遠い過去のことゆえ、それに向かって、どれだけ近づくことができるかも心もとないが挑戦してみる価値はあるのではなからうか。

1 語頭 r 音がそのまま残っている。

アイヌ語には語頭 r 音がごく普通に見られる。その一つに、

①rok ロク「二人以上のものが座る」があった。これがヤマト語にも語頭 r 音のまま引き継がれた可能性がある。アグラを *agura* (人・男) *o* (座り。ろくの数形) という通りアグラは男性中心のアイヌ社会における基本的な座り方であり、*roka* と言えば通常はアグラのことになる。一方、ラ行語音頭を古語辞典で見ると、いずれも後の漢

語由来のものばかりで、古来のヤマト語起源のものはない。ところが、方言辞典には、「ろく 胡坐。あぐら。千葉県武郡・京都府与謝郡・高知・老岐。ろくにいる」あぐらをかく。北海道・関東山形県飽海郡・新潟県岩船郡・富山・長野。ろくにする」福井・岐阜・奈良・大阪・鳥取・石見・大分・福岡」がある。これは、古くから全国に広まっていたと思われ、縄文語 *roka* (座る) ↓ 全国 *roka* と引き継がれたものである。また「らく 胡坐。あぐら。「ラクにいろ」盛岡」もあるが、これも *roka* (あぐら) ↓ (*o* ↓ *a*) *ra* (*o* ↓ *a*) (あぐら) とみられる。「ろくにいろ」「ろくにする」に対応して「ラクにいろ」「ラクにする」がある。「どうぞオラクにして」は「アグラをかいて」が原義か。このロク・ラクは、地名を除きヤマト語圏内に唯一残った語頭 r 音語であろう。クツログも *ko* (くぼ地) 安心できるといふ) の *o* ↓ *u* *ku* に *roku* (一緒に座る) かもしれない。各地にある道祖神(もと漢の旅行の神)をドーロク神ともいうが、境や辻に *ro* (二つ、二人) *roka* (すわっている) 神で、男女神、天孫降臨時の前遣アメノウズメと道案内のサルタヒコに付会して、縁結びの双体道祖神に、あるいは集落への疫病・悪霊の侵入を阻止する塞の神に変身する。「ドーろく。つれあい。夫。陸前。」はこの *tu* *roka* が原義であろう。そのドウロクはヤドロクに変わった。近代アイヌ語では夫婦になることを *usamroka* (*u*・互いに *-sami*・そばに *-roka*・座る) という。「互いにそばに座る」ということは *tu* *roka* 「二人で座る」ことである。ドウロクはまた *o* ↓ *a* で、ドウラクにもなった。ドウロク神は四国でドウラク様である。「道楽」は和製で、不倫、駆け落ち(関東)、放蕩(奥羽)など、主に男女交

友が対象である。ドラ息子もしく、それがドウ
ロク同様アメノウズメとサルタヒコの *tu-rok* に
遡るとみられる。

② *reng* レンゲ 唯一残る語頭 *r* 音がロク・ラク
である、自分の発見に有頂天になっていたところ、
『語源研究43』の恵送を受け、敬友永田茂氏
論文『縄文地名の数詞地名例—アイヌ・縄文語の立場か
ら—』を拝見し衝撃を受けた。

そこには蓮華岳(山)のレンゲはアイヌ語の *ren*
(三つの) *-ke* (所・部分) であるとあり、明快な
図示とともにおよそつぎのような解説があった。

三俣蓮華山…ピークを中心に尾根が三俣のわか
れ、長野・富山・岐阜県の県境を形成。三俣とい
う漢字の意味、蓮華のアイヌ語の意味、三俣の地
形、の三者が完全に一致。小蓮華山…長野・新潟
県境、ピークから三方に尾根。蓮華岳…富山・長
野県境、水俣尾根。蓮華山…山口県3市町境、三
俣尾根。今までうかつにも蓮華山(岳)は薬師岳・
阿弥陀岳・大日岳・地藏岳、浄土山など一連の仏
教山名かと、気にも留めていなかった自分の浅は
かさが思いしらされ、氏の洞察力に改めて感銘を
受けた次第。「蓮華」と言う漢字を当てたのはもち
ろん漢語が入ってからであるが、「レンゲ」という
言葉は縄文時代から続いていた。渡来系支配層の
勢力が及んでいる範囲では姿を消した語頭 *r* 音が、
生活語や地名として生きているのである。

2 語頭からは姿を消しながらも *r* 音のままで
生き続けている

①語頭の *r* 音に母音(原則として *r* の後母音)を前置

する。

アイヌ語には語尾の *r* を発音する場合、その直
前の母音を響かせる習慣がある。例 *chir*→*chiri*
とり、*yukar*→*yukara* ユーカラ、*tar*→*tara* 縄。同
じく樺太(サハリン)アイヌ語では語尾のみなら
ず、すべての音節末の *r* はその直前の母音をその
直後に繰り返すことで開音節化される。例 *horkew*
→*horokew* (狼)、*perke*→*pereke* (割れ)、*pirka*
→*pirika* (美し)、*surke*→*suruku* (とりかぎ
の根)。似たように日本語では語頭の *r* 音の発音に
際して、つぎのように、その直後の母音を前置す
ることがおこなわれた。

(a) *raimani* (アララギ) → *aramani* (ゼロで連
子音解消)、木(アイヌ語 *ni*) → *aramani* (アラ
ラギ)

(b) *rama*→*arama* (アラマ(心臓・魂が))！アラ！
アイヌ語は心臓は紐の先に垂れていて驚くとその
紐が断たれて心臓が外に飛び出すと考えていた。
それを防ぐトツサの言葉がアラマではなかったか。

(c) *rika* (鯨の白身。北千島アイヌ語リカ) プラ
ス母音 *rika*→*irika* イリカの →*iririka* イリカ。

(d) *rika* (たるき、うづばり)→*ri* (高い)→*ika* (上
面・表面・岸)→*irika*→*irika* (イラカ)

「いらか【薔】」イラ(荊)カ(処が原義。高く
とがった処の意)①屋根の背。家の上棟。②(瓦
の)屋根(古語辞典とするが、①に関しては荊(ト
ゲ)処(ところ)が、なぜ屋根の背の原義なのか。

「高い上・岸」が語源であろう。②は別語源で、
「(われらを)→*ri* (チクツとする)→*ko* (表面)、

つまり魚鱗。イラコ、イラカ瓦、ウロコ。その *iri*
(われらをチクツとする)→イラは、イライラ、
イラだつ、イラくさ、イラむしに。

後世、日本語内部やアルタイ語にも、つぎのよ
うな類例がある。

(e) *rasetta* (ラセイタ「羅背板」) 羅紗(らしや)
の一種。地合薄く手触りのやや粗いもの。「春も雪
—の袖駒止めて」(俳・名取川五 ポルトガル *raxeta* 古
辞。アブラナの一種のアラセイトウは葉の感触が
このラセイタに似ていることからの命名であるとい
う。

(f) *rossiya* (ロシア)→*orosiya* (オロシア)

(g) *ram*・*rama* (胸、心、靈魂もとは心臓)→*rama*

「ラマ【接尾】」接尾語ラに接尾語のマの複合した
もの。未詳。「おほみことらま」「やつこらま」な
どの形で用いられ、抽象化された意味の名詞をつ
くる。(古辞)らもマも意味不詳の接尾語という
が、奈良時代には複合語の構成要素となっている
ものの、遡れば独立語の *rama* (魂・霊)であつた
ろう。おほみこと(大御言)「天皇の命令・言葉。
「らま(魂)」→*r*→*魂*(タマ)・*霊*(タマ)。お
ほみ(大御)という敬語を除けば言霊ということ
であろう。梅原猛はその *rama* に関して、「日本書
紀には、有名な、「夜摩若波区珥能摩倍邏摩」とい
うのがある。「大和は国のマホラマ」、このラマも、
大和は日本の国の最も優れた魂なのだというふう
に解するのたいへんよくわかる。」と語るが、さら
にくだけた言い方をすれば「国の心臓」と解すれ
ばよりよくわかり、日本語のタマは遡りアイヌ語
のラマと解し、アイヌとの交流がなかった日本書
紀の時代の言葉、縄文語を引き継いだ時代の言葉
と見れば、よりよくわかることになる。

(h) *ramu*…(日本語。推量の助動詞。やがて散る
ラム(散ると思う→散るだろう)。Ramu ラムは本
来「思う」という *ramu(a)* (心)ラム・ラムの働

きを示す動詞 (ram の動詞化) だったのではなからうか。

(i) rok (座る) — kamuy (神) — rok (座る) — (と)ろ、もの、こと) : カムロキ。祝詞にあるカムロギは、神が、鎮座している・トコロ／コトが原義か。同地名が北海道に六カ所あるという。

3 発音の近い他の音に転化した

アルタイの中のツングース系の進入が顕著だった樺太 (サハリン・唐人 (カラフト)・フトはヒトの東北訛り) では、ritenni → nitem (柔軟な木)、rocha → nocha (ロシアヤ)、rar → tar (眉)、retar → tetar (白くある) など、語頭 r 音や n や t への転音がみられた。同様な動きをアイヌ語日本語間で見つけてみよう。

ra : 地下茎を食用とする草の葉 — na : 菜。
reni : (上から下へ) 降りる、くだる、さがるもの → nami : 波。

ranke : おろす → nage : 投げ。

rap : 大勢おろる → nabi : なびく。

raraypa : なぐる → nadaypa → nadoyaka →

nadaraka : ナダラカ。

re : 名 → ne → na : 名。

rek : 鳴へ → ne : 音、naku : 鳴へ。

reka : 褒める → nega 「ねがひ」神などの心を慰めやわらげることによって自分の望むことが達成できるように取り計らいを期待する。

まだ、続けし、つぎの万葉集東歌の例のようなものもあるが、語中 r 音の転音例には、r → n, r → t/d, r → y/i などが多い。これらのことからアイ

ヌ語はアイヌ語にとどまらず縄文語にさかのぼること。その縄文語は日本語にもひきつがれたこと。「本来我が国にはラ行音に始まる語」があったことなどがわかる。

「うべ児なはわぬに恋ふなもとつくののがなへゆけばこふしかるなも」

《特別寄稿》②

生命の河を遡り (2)

田島早苗

焼け残った芋ひと籠

何もかもすっぱりと焼けてしまったと思った早紀の家だったが、家の東側は、外壁に貼られたトタンと、生垣のお蔭で焼け残っていた。半分萎れていた大きな無花果の木や葡萄棚、そして嬉しいことにポンプ井戸も健在だった。流しの傍には、馬鈴薯を入れてあった大きな籠が引き出され、半分焼け残っていた。それは、名古屋から疎開していた父方の祖父が引っ張り出してくれたものだった。

名古屋で二度の戦災に逢い、早紀の家に疎開していた九十歳近い祖父は、名古屋の空襲の時大八車を曳き、一升瓶の酒をラッパ飲みしながら火の中を逃げた、と言う話がまことしやかに語られるほどの酒豪だったが、早紀の家に来てからは酒も飲まず、武士の末裔らしく、無口で静かな日々を過ごしていた。

大好きな祖父だったが、食事の後に入れ歯をお茶で漱ぎ、そのお茶を飲む姿には何時までも馴染めず、自分のことが精いっぱいの生活の中で、祖

父の孤独を思いやることも出来ない早紀だった。でも「もしもの時は、蚊帳だけは忘れるなよ」と言う祖父の口癖のお蔭で、二張りの蚊帳を持ち出すことが出来、その上火事場の馬鹿力を發揮して、馬鈴薯の大きな籠を井戸端まで引きずり出してくれた祖父の沈着な行動が、皆の大きな支えになった。何も食べ物がなかったあの時、少々焦り臭いそのジャガイモが、涙の出るほど美味かった。

左側の先端に有った外厠も、やぶ椿の大木や、楨囲いのおかげで助かり、飲み水確保と排泄物の始末が出来るお蔭で、焼け跡整備もはかどった。燻り続けているトタンの衣装ケースに水をかけ開けてみると、焼け残った着物の切れ端が出てきた。早紀は、預かり物の嫁入り仕度の残骸にゴメンねと呟くばかり。

片田舎の集落が空襲に遭ったのは、軍需工場を襲撃する筈の焼夷爆弾が逸れたのだらうと言われたが、軒並みやられた岐阜市の中心部と違い、ポツンぽつんと、斑な被害で、まるで運の悪い家だけが貧乏くじを引いたような悔しさだった。

住む処、着る物、蒲団も何も無くても、生きる為には先ず食糧確保だと、隣の小母さんに誘われ、足が痛い母に代り早紀が近くの農協の焼け跡へ焼け残りの米や味噌、砂糖等を漁りに出かけた。

焼け跡から苦労して掘り出したのは、燻り臭い味噌や米、溶けて飴状に固まった砂糖などで、さぞかし皆が喜ぶだろうと、得意顔して帰ってきた早紀だったが、全く徒労に終わったのだった。折角掘り出して来た食品には焼夷弾の油の臭いが染み込んでいて、いくら空腹でも、口に入れると吐き気がして全く食べられなかった。その後も、食べるものを求めてさ迷った焼け跡で見た動物の死

骸や、川に浮いていた水ぶくれの軀のことは早紀の心の奥深くに沈んだまま。

岐阜の空襲から一か月、広島・長崎と続いて原爆が投下され、日本は敗戦に追い込まれていった。ラジオから流れる陛下のお言葉の意味が聞き取れず、悔し涙をぬぐう大人に混じり、唯もらい泣きしていただけた早紀だったが、「もう少し早く戦争が終わっていたら、空襲にも合わなかったのに」との悔し涙も混じっていたかも知れなかった。

住む処がない早紀たちは、お寺の本堂の仮住まい。本堂は幕で二つに仕切られ、見知らぬ家族と分け合って住むことに成った。

蒲団や着る物は、空爆を免れた人たちが持ち寄ってくれて何とか凌ぐことが出来、人の情けが見に沁みる九月が始まっていた。

幸い無傷だった小学校では、受験のための補習学習が始まり、進学する子等は毎日居残りだったが、進学できない早紀は、授業が終わると飛ぶように目と鼻の先にある寺へ帰り、三歳の妹の面倒を見るのが日課だった。

食糧不足はどん底まで来ていて、配給されるのは、さつま芋、殻を取っただけの丸大麦、高粱、大根、豆の滓等の代用食が多かった。何時も腹を空かせている四人の子供たちを抱え、親の苦労は並大抵でなかった。持ち出しに成功した二張りの蚊帳は、とくに食料に化けて無くなり、ふかし芋一本の昼食はマシの部類、少量の麦こがしを舐めて噎せたり、炒った一握りの大麦を齧り、それで昼食は終わると言う事もしばしばだった。

寺の本堂の階段に腰かけて、ぼんやりと、小学校で補習を受けている同級生のことを思い、沈みがちな日々が過ぎて行った。早紀の青春の入り口

はお先真つ暗の穴だった。

或る夕方、担任の先生が「お母さんにちよつと話が」と訪問され「何とか早紀さんに女学校を受けさせてあげられませんか、可哀そうで見えられません」と、熱心に説得してくださった。先生と母の話を漏れ聞きながら、半分は諦めていた早紀だったが、「ものすごく惨めな思いや苦しい思いをするけど我慢できる？」という母の辛そうな顔に「どんな苦労も、惨めな事も平気」と力を込めて頷いていた。「人間の価値は学歴じゃない」と反対だった父を説き伏せてくれた母の涙の決断と、時には厳しかった先生の優しい配慮のお蔭で、進学組に仲間入り、真つ暗な穴に一条の光が射した瞬間だった。

間もなく元の焼け跡に、狭いながらも早紀達の家が再建された。肩身の狭い寺の居候を抜け出すことが出来、他のことには目をつぶって受験勉強一筋の日々が始まった。

頑張つて難関を突破した早紀が入った岐阜県立の高等女学校は、別棟の研修校舎を残し、丸焼けだった。雨が降ると方々雨漏りのするバラックの教室で知識欲に飢えた少女達の高揚した日々が始まったが、終戦後の混乱の中で、先生方の教育方針も定まらず、特に今まで敵国語として排除していた英語の授業はお粗末だった。

市の中心部の学校から来た子たちの、豊かに育つて物怖じしない言動に押されっぱなしの早紀は、時には折れそうになる心に鞭打ちながら、未知の世界の数々を必死になつて吸収しようとしていた。そんな折、学校で家庭環境調査用紙が配られ、父親の職業を記入する欄に「著述業」と書いたのは早紀の精一杯の矜持だった。

昭和十八年の頃、父の書いた物語が入選してラジオで放送されたことがあった。

それは、濃尾平野で、大きな氾濫が繰り返されていた木曽川・長良川・揖斐川・三川の合流地点の築堤工事を、幕府の命令で任された薩摩藩が、今迄誰も成功しなかった難工事を、十五年の歳月をかけて成し遂げるまでの苦難と、成功の暁に多数の犠牲者を出した責任を取って、工事奉行の平田靱負（ひらたゆきえ）が切腹をして果てるまでを描いた壮大なドラマの自作自演だった。

ラジオから流れる父の語り口を、誇らしく聞いていたあの日を思い出し、たった一度の晴れ姿だったけれど父は著述業だと胸を張って書いたのだ。父が永年書き溜めていた原稿が、すべて灰燼に帰したことが改めて口惜しくてならない早紀だった。

因みに、氾濫も収まり肥沃な農地が生まれた三川の合流地点には、偉業を讃える、薩摩義士顕彰の碑が建っている。

クラブ活動が盛んだった女学校で、文芸部と合唱部に入り、順調に滑り出したかに見えた学校生活は、早紀の苦難の始まりだった。

父は、その頃流行り出した網代日傘を張るようになり、日傘の縁の仕上げは早紀の仕事になったのだ。毎日練習がある合唱部は続けられず涙を呑んで退部、授業が終わると、一校下を通り抜ける長い道のりを、小走りに家へ急ぐ毎日が始まった。

家の天井まで、広げて積み上げられた日傘の花が毎日早紀を待っていた。先ず、はみ出している部分を手早く裁ち缺で切り取り、骨と骨の間が三角になるように張られた糸に沿って握り缺で三か所に切り込みを入れる。糊を付け折り曲げて行くのは、父や母の役目。

ぴんと張った糸すれすれに切り込みを入れるのは難しい作業だったが、糸を切る事も無く、桶に裏面を見せて乗せた傘を左手でクルクル回しながら右手の握り鉄がまるで魔法の様に動く早紀の手捌きは、誰にも真似できなかった。然し大奮闘の右手は重くなり、痛くなり、やがて痺れてくる。いくら頑張っても、なかなか終わらない日傘の山、早紀の肩甲骨が右だけ異常に発達したのは、成長期に右手を使すぎた後遺症だった。

でも早紀は、母との約束を忘れず、泣き言は一切口にしなかった。納得できない事があると。押入れに立て籠もり、なかなか出てこず母を嘆かせた小学校二・三年の頃の勝気な早紀の復活だった。乏しい中でやり繰りしている母に授業料の袋を出せず、「忘れしました」と言って先生に睨まれ、絵の具がなくなっても買い足す金が無い時は、「買い忘れたから貸して」と友達に言い訳をしながら借り、その場しのぎの小さな嘘を重ねつつ、綱渡りのような女学校生活を続けて居た。そんな中でも、心を許せる友達も出来始め、市の中心部から来た同級生への負い目も薄れて行った。

校庭の隅で隠れるようにふかし芋の弁当を食べている早紀の処へやってきて「私さつま芋大好きだから、取り換えてこしよう」と言って遠慮する早紀の手に眞白なご飯を載せてくれた農家育ちの優しい友もいた。

アメリカのララ物資と呼ばれた救援の衣料が届き、数が少ないので分配方法を話合ったとき、一番豪華な毛皮付きの黒いコートは満場一致で早紀の物になったのだった。誰の目にも早紀の貧しさは際立って見えたのだろう。嬉しくも情けない出来事だった。

暫くすると、学校再建の話が具体化され、父兄から寄付を募ることに成った。

寄付金の口数を記入する用紙を恐る恐る差し出したときの困ったような母の顔を、まともに見て居られなかった。

その上、教育改革の6・3・3制の施行が決まり、父兄の寄付で建てられた新しい校舎は一度も使用しないまま、新制中学の校舎になってしまうことが言い渡された。

教室は騒然となり、早紀も、たとえ一口でも血の滲む様な思いで母が工面してくれた金が入っていると悔しくて、「土足で歩く！」と言う友達の間に入って土足で白木の匂う廊下を歩きだした。

その時の、歩けば歩くほど虚しくなっていく自分の情けない姿は、辛い青春の一ページとして胸の底に沈んでいる。

男子校と合併して県立岐阜高校併設中学生になった早紀たちは、新制中学に進んだ友と違い、高い月謝はそのまま払い続けねばならなかった。教育の端境期に翻弄された早紀の悲しい現実だった。下級生が入ってこない最後の女学生は、此処でも貧乏籤を引き。一学級上の子たち迄は、三年プラス一年の学習で高等女学校卒業の資格が貰えたのだった。

男子校に合併しても、女子と男子は別々のクラスだった。進学校としては珍しく野球部が甲子園出場を決めた時、男女全員が講堂に集まり壮行会が行われた。皆の前に並び、エールを受ける野球部員の誇らしげな姿を、めくるめく思いで、眺めていただけの、青春と呼ぶのには余りにも幼い早紀だった。

三年生になった頃、網代日傘の代わりに、番傘や蛇の目傘を張るようになった父のお蔭で、地獄のような作業から解放され、それなりに学校生活を楽しむ事が出来るようになった。心を許し合える二人の友達にも恵まれ、チラシの割引券を集めては映画を見に行くのが最大の楽しみになった。

特に洋画が好きで、初めてカラーの「ステートフェア」？を見た時、カラーに字幕の訳を付ける技術がなく、吹き替えを聞くイヤホンを借りる金も無く、時々友のイヤホンを貸してもらって聞くだけでは、友も早紀もチンプンカンプンだった。画面を眺め、いろいろ想像を巡らすだけで楽しかった。お互いに忘れられない青春のひとつまだ。

越境入学の為下宿している友の部屋へ、一晩泊まりで押しかけたのは、「課題の研究を集まってする必要がある」と母にごまかしを言って実現した貴重な一夜の体験だった。

黒焦げの焼き秋刀魚を丸齧りしながら、仲良し三人組の話題は尽きなかった。下宿しているのは医者の娘、もう一人は奈良県知事を務めたこともある父を持っていたが、二人とも奢らず優しく掛替への無い友だった。

「男と女のことについて」と言いながら、「貴女のお父様は医者だから教えて頂いたでしょう」と等と友を困らせる話題も飛び出し、笑いの絶えない束の間の輝きだった。

揺れ動く教育行政が次に打ち出したのは・学区制だった。希望する学校を選ぶことができず、併設中学が終わると皆別々の学校へ進むことに成り、ようやく出来た友との別れが迫ってきた。相変わらず貧しい我が家にこれ以上の負担をかけたくない早紀は、進学をあきらめ学業は中断したのだっ

た。

学業は続けられなかったが、青年学級の仲間と取り組んだ演劇活動や合唱部会に楽しみを見つけ、早紀の明るい日々が始まった。県の演劇コンクールで演技賞を貰った事、教育委員会の制作した短編の教育映画に出演、男女二人で、他校下の青年学級を自転車に乗って訪問するシーンでは、自転車に乗れない早紀の特訓から始まった事など、すべて輝く早紀の青春だった。(続く)

《読者投稿》

私の国府巡り「礎石」

京都府精華町今井 直

東大寺大仏殿の裏手にある講堂跡。まばらな松林に朝もやが立ちこめ、静かな時間が流れる。松葉散り敷く地面に、幾つもの礎石が整然と並び、この物言わぬ礎石を眺めていると、千三百年という時の流れは生半可な歴史かじりでは想像もつかない。いま私が見ているのは実景ではなく、『古色大和路』の巨匠・入江泰吉氏(1905~1992)の写真である。

入江氏は東大寺旧境内に住み、半世紀にわたって美しい大和路を撮り続けた。四季折々の大和古寺、仏像や万葉の花など全作品は、死後、奈良市に寄贈された。奈良市は新薬師寺(高畑町)の隣に、「入江泰吉記念 奈良市写真美術館」を建て、常時展示している。「入江泰吉旧居」も同様に市に寄贈され、昨年から一般公開されている。吉城川沿いの戒壇堂を望む旧居は閑静な和風建築で、離れにしつらえた暗室も見学できる。新緑や紅葉が映えるアトリエは、特に入江氏のお気に入りだった

らしい。志賀直哉・白洲正子・杉本健吉・桂米朝ら多くの文化人とも交流が深かったという。

実は、私は高校生の時に入江氏に会っている。写真倶楽部を創部した悪友の口車に乗せられ、カメラも持たず部員に名前を連ねていた。どういうツテか分からないが、ある日入江氏がわざわざ高校に来て下さった。撮影技術や写真の面白さなどを教えてもらったのだろうが、残念ながら余り記憶がない。後に写真に没頭するとは夢にも思わず、今となっては後悔でいっぱいだ。そのすぐ後に、親に無理を言ってカメラを買ってもらったのは、きつと入江氏が私に好奇心の炎を灯してくれたのだと思う。私が初めて持ったカメラは、露光センサーをレンズの周囲にちりばめた「ペトリ7」だった。その後、フィルムからデジタルの世に変わったが、現在愛用している一眼レフは五台目と、ずぶの素人ながらカメラ歴は長い。入江氏がフラインダーを通して切り取った画は、たとえば礎石であつてもただの石ではない。入江氏の写真には、歴史に裏打ちされた風土とか、万葉の故地にふさわしい文学的土壌が感じられるから、ファンが多いのではないだろうか。

奈良には古寺・廃寺がやたら多い。藤原京右京八条三坊にある本薬師寺(特別史跡)は、天武天皇が皇后「後の持統天皇」の病氣平癒を祈って建立した官寺である。平城京遷都にともない薬師寺が西の京に移築されたため、本薬師寺(元薬師寺)と称されるようになった。金堂の南側に東塔と西塔を左右対称に配した伽藍配置は、西の京の薬師寺もほぼ同じだ。現在は金堂跡の小さなお堂の前に、十九個のかなり大きな礎石がゴロゴロと転がり、さびれた感否めない。いずれも花崗岩で方形の

柱座「④柱との接合面」が加工されている。東西の塔跡は水田に囲まれた高さ一メートル以上の土壇上にある。東塔跡には四天柱(してんばしら)と側柱の礎石が十数個と、中央に舍利孔(しゃりこう)をもつ心礎があり、西塔跡の心礎にはホゾ「凸部」が施されている。畝傍山を見晴らす広大な水田には、水草のホテイアオイが植えられ、近くの小学校の児童が手入れしているという。毎年夏の終わりには涼し気な花で覆い尽され、訪れる人も多い。因みに、伐折羅(ハサラ)大将など十二神将立像で有名な新薬師寺の「新」だが、「ニュー薬師寺」という意味ではない。薬師寺は法相宗で新薬師寺は華嚴宗と宗派が違うからだ。霊験あらたかな薬師如来の寺という意味だそう。

廃寺は寺院の名が不明の場合、所在地名から「○○廃寺」と呼ばれる。「吉備池廃寺」は、二上山の遠望が美しい吉備池(桜井市)の池畔にあったことから、後世にその名がついた。南都七大寺の一つである大安寺の前身と云われる古寺である。私はいつか機会があれば、スイスの「アルプス廃寺」を見てみたい。奈良県西端の香芝市尼寺(にんじ)にある尼寺廃寺跡(国史跡)では、昨年春に学習館を備えた史跡公園が完成した。これに先立つ発掘調査の結果、中心伽藍は南北約七十二メートル・東西約四十五メートルの回廊に囲まれ、北に金堂・南に塔の、法隆寺・若草伽藍配置であることが判明した。東側に官道が走るため、橘寺(明日香村)と同様に正面は東向きである。七世紀末の造営で聖徳太子ゆかりの葛城尼寺とする説もある。注目を集めたのは塔跡で見つかった巨大な心礎で、約三・八メートル四方「八畳ほどの広さ!」、厚さが約一・八メートルあり日本最大級である。塔の心柱を据える心礎は飛鳥

時代には地下式が一般的で、ここも四天柱礎石より約一・二メートル下の地中に埋められていた。心礎の中央には、心柱と四本の添柱（そえしら）をはめ込む柱座が彫られている。「⑤橘寺の五重塔跡の心礎には、円柱の周囲三方に添柱を付した柱孔がある」この頃は礎石建て技術が未熟で、心礎を深く埋めるのは掘立柱式の名残と考えられる。金堂と塔の基壇は、残存する礎石を原位置のまま整備し展示されているが、巨大な心礎はそのまま埋め戻された。その代り、学習館で実物大のレプリカを見ることが出来る。

ひと口に礎石と言っても、自然石のままだったり、上面の加工も平坦なもの、円形や方形の柱座を設けたもの、柱と柱をつなぐ横木をのせる地覆（じふく）座を備えたものなど、その形式は様々である。柱と礎石は今日のようにアンカーボルトで固定せず、「遊び」を作ること地震の揺れを逃がす仕組みとは、先人の知恵は凄い！そして柱の横ズレを防ぐため、「ひかり付け」という技法が用いられる。礎石の柱座の中心に突起「凸部」を造り出したり、逆にホゾ穴「凹部」を加工した表面に、石灰の粉を撒いて柱を乗せ、凹凸が合わずに石灰が付着した部分は削って、何度も繰り返し調整する。歯医者さんがカチカチと赤い色を付けて削っていく要領だ。凹凸がピタリとくっつければ、屋根瓦や建物の重みで倒れることはない。

「最も美しい国分寺の塔跡は？」と問われれば、（そんなマニアックな質問は誰もしないだろうが）私は躊躇なく「山背国分寺（京都府木津川市 七重塔跡）」を選ぶ。一辺が約十八メートルの方形土壇に、大きめの心礎を中心に各礎石が原位置のまま現存している。十五個の花崗岩はいずれも円形造り出しの中央に凸ホゾ

を備え、側柱礎石には地覆座が造り出されている。飛鳥・白鳳時代と異なり、非常に丁寧な細工を施して技術の高さに驚嘆する。「恭仁京の大極殿を山背国分寺に施入した」（『続日本紀』 天平十八年（き）九月の条）のだから、国立寺院としてチャチなことはできなかつたのだらう。南東隅の側柱の礎石二個を欠いているが、周辺の美観にもよく溶け合い、いつそ七重塔というスカイツリーなど無いほうが…とも思われる。美しい塔跡礎石のベストワンだ！

石材を調達する環境によっても礎石は様々だ。但馬国分寺跡（兵庫県豊岡市）の塔の礎石は溶岩を利用している。現在はスキー客に人気の高い神鍋山（かんべやま）は二万年前に噴火し、今も山頂には周囲約七百五十メートル、深さ約四十メートルのすり鉢状の火口が残っている。ここから流れ出た溶岩は約十メートルの円山川にまで達した。但馬国府や国分寺は円山川西岸に位置しており、付近で採れる溶岩が使われたのだ。江戸後期には、日本全国を作った伊能忠敬が但馬国分二寺を訪れている。丸二年にわたる九州の測量を終えた伊能測量隊は、文化十一年（1814）、円山川流域を中心に測量のため但馬国にやって来た。一日も欠かさず書き続けた『測量日記』に、「国分寺旧跡の田地に柱の敷石三ツ、法花尼寺（国分尼寺）旧跡に柱礎七ツあり」と記している。それから約二百年後の現在、創建時のまま現存する礎石は僧寺・尼寺にそれぞれ二個を残すのみという。

「毛原（けはら）廃寺」の所在地は、奈良県山添村毛原。山添村は県の東北部、三重県名張市と県境を接する山あいにある。野生の猿や鹿の姿がよく目撃される山里だ。奈良市の中心部から車で一時間（名張駅からは二十分）ほど、茶畑が広がる山道を

走ると、毛原の小さな集落がある。かつてここに、都の大寺院と見紛うような堂々たる七堂伽藍が立ち並んでいたと云う。私は産経新聞の「なら再発見」という連載記事で、毛原廃寺の存在を初めて知った。すでに明治三十年代に、毛原廃寺は壮大な規模を誇る伽藍跡と認定されていたと云う。平城宮大極殿の発見で知られる関野貞（ただし）博士による調査の結果だった。

これまで礎石が七十個余り確認されており、そのほとんどに精巧な加工が施されている。出土した複弁八葉蓮華文の軒丸瓦や唐草模様の軒平瓦から、天平時代の寺院跡と判明し、大正十五年（1926）に国の史跡に指定されたが、本格的な発掘調査は行われたことがない。寺の正式名称も分からず、何の目的でこんな山奥に大寺院を建てたのか、果して実際に寺院として完成したのかも定かでない。しかも毛原廃寺に関する文献が一切なく、「幻の大寺院」と呼ばれる…などの予備知識を得て、私は現地を訪ねてみた。

毛原廃寺跡は、遠くを横切る川に向かって舌の形に展開する河岸段丘上にあった。道端に立つ案内矢印に従って集落の路地を縫って行くと、巨大な礎石群が目飛び込んできた。直径が二メートルほどもある巨石が数多く並んでいる。ふと見ると、「毛原廃寺址」の石碑があり、金堂跡だった。伽藍全体の礎石の位置を示す説明板によると、北から金堂・中門・南門が中軸を揃えて南面する配置だ。平坦地が狭く、急な勾配や切れ込む谷など地形上の制約を受け、金堂の北側にあるべき講堂などは、塔と共に西方に埋れているらしい。

金堂跡の礎石には、それぞれ直径が七十センチほどの円柱座が造られているから、礎石の上に立つ柱

もそれ位の直径だったということになる。平城宮大極殿の柱とほぼ同じだ。礎石の配置状況から、金堂は間口七間（約二十四^{メートル}）、奥行き四間（約十三^{メートル}）の規模で、唐招提寺金堂に匹敵する堂々とした建物だったようだ。「ここ（金堂跡）の石が、寺跡で最も大きいねん。三十個ほど地面から出とるよ」と、礎石に腰かけて農作業している老婆が教えてくれた。

金堂から南へ約四十^{メートル}ゆるやかに下った所に、中門跡の礎石が十数個、さらに一段低く十^{メートル}ほど下った地点にも、南門跡の礎石が並んでいる。いずれも何の狂いもなく完全に残存していると聞く。礎石の大半は民家の庭先や畑跡に露出している。

「国の史跡だから、畑で耕作はできない」軽トラが通行する里道でも、私は地覆座を付けた礎石を三個見かけたが、表面がかなり摩耗していた。こんなものアリか？文化庁や教育委員会は早く対処しなければならぬ。

今は農家の庭先だが、金堂の前庭に「山辺の御井（みい）」と刻まれた石碑のそばに、直径が一^{メートル}ほどの古井戸がある。碑陰には万葉歌が刻まれていた。

山辺の御井を見がてり 神風の

伊勢の乙女ども 相見つるかも

（万葉／巻一八八 長田王）

（山辺の御井を見に来て、思いがけず御井の水を汲む伊勢の乙女たちに出逢ったことよ）

伊勢の斎宮に赴任する官人が、途中立ち寄った時に詠んだ歌だ。のどかな毛原の山里で、たまたま出逢った乙女たちと談笑し、心ませたことだろう。この辺りは当時、東大寺領「板蠅の杣（いたばえのそま）」「^④木材を切り出す山」だったから、

官道の東海道から外れた山中である。長田王がわざわざ寄り道したのは、毛原の大寺に参詣するためだったのか、これもまた文献が全くなく謎である。

これほどの規模を誇る大寺でありながら、いつしか歴史の表舞台から姿を消し、礎石のみが深い山里で静かに時の流れを見つめてきた。もしマニアックな同好の士から、「最も印象深い廃寺跡は？」と問われれば、私は躊躇なく「毛原廃寺」を選ぶ。

「幻の寺 毛原廃寺」入江泰吉氏ならどのような作品に仕上げただろう？見てみたかった。

* 養生日記

堀江実穂

・某月某日

これまで随分沢山の文章を書いてきた。文章を書くことが好きだった。しかし、最近すっかり書けなくなってしまった。

人に見られるのだから、上手に書かなければいけない。

そんな事を思ってしまった途端、言葉に詰まってしまった。

上手な文章って……。

それは私の悪い癖だ。悪い性格だ。

人に良く思われたい。好かれたい。みんなの人氣者になりたい。

誰にでもそんな気持ちはあるのだけれど、私は人一倍にそう思ってしまう、人の目ばかりを気にしてしまう。

人の目なんか気にしないで、気楽に書いたら。

そう自分に言い聞かせる。

でも逆効果でドンドン言葉が消え去ってしまう。

・某月某日

5人組のアイドルグループ、ネバーギブアップの大ファンで、よくライブに行く。

月に2度ぐらい。

そのライブに行った時のこと。

NGUのタオルマフラーを首に巻いていた。友だちとの会話に夢中になっていたら、知らないおばさんが来て、私の首からマフラーを盗って逃げて行った。友達が気付いて教えてくれた。

急いで追いかけて行って、「私のタオル返して」というと、そのおばさんは、「今の若いのは口の利き方も知らないのか。拾ってあげたんだから有難うを先ず言え」と怒鳴りながらタオルを投げつけて、行ってしまった。

ところがそのおばさんグループに近づいてサインをもらっていた。

寂しい人がいる。

やさと暮らし(3)

やさと女

花粉が舞っている、春がやってきた……(3月)

・籠編み

弁当持参でK宅へ籠編みレッスン……。材料の竹は用意され、作業部屋は十分に暖かい。Kさんのクラフト材料は自分で調達、春先に東北で開催される物造りフェアへ出品予定、その材料（山葡萄、胡桃、山藤、青葛籠などの蔓）を地元で採取（いっかつ同行した

いっ）自然の蔓で編んだ製品（籠等）は、使うほどに

味が出て、フェアでも大人気…！
サマーバスケットの完成は次回に…。

・唐房案内

オリーブのママさんを、志村陶房へ案内すること…？片岡新田の一番奥まった所、縁側（廊下）が座敷を囲んでおり、土間がある。畳の部屋は、田の字作り（障子や襖で仕切られ、必要に応じて大部屋として使える）の家だ。庭には梅の花や、華桃も満開、そしてタバコ乾燥に使ったのか、小屋が二つある。ママさんは、優しい感じのカップが気に入ったよう…。炬燵で美味しいお茶をご馳走になり、しばしお喋りを…。

・猫の日

お隣には、たくさん猫がいる。高齢のお婆ちゃん（95歳）が、押し車で庭に出ると、行列を作りゾロゾロと…。お婆ちゃんが椅子に座ると膝の上や足元に纏わり、体を撫ぜられて喜ぶ。猫も人間もマツタリとして、まるで別世界…。その猫は我が家にも数匹やってきて、「ご飯だよー！」の呼び声で帰って行く。デイサービスの日には、玄関先で帰りをまっている、何とも可愛いものです。

・もう直ぐ春が

ここ数日の激しい寒暖の繰り返しに体がついていけない。三寒四温は、春に向かう証し…。寒さの中にも、其処此処で春の兆しを楽しむ事が出来る。八郷支所の隣にある、中央公民館の雛飾りを見に行く。此処の雛飾りは毎年愉しみにしている。吊るし雛、手作り雛、和紙雛…どれも驚くような作品。子供たちのお雛様も、ひとつひとつが丁寧

で感心した。我が家の庭では、水仙やクロッカスの花も咲き、春を感じている。

・田舎の朝は早い

隣の牛屋さん、まだ暗いうちから牛舎に出向き大音量でラジオを鳴らす。そして、煙草農家のトラクターが唸り、道向こうの葡萄農家は出勤前に一仕事。我が家の朝も早い、4時過ぎには囲炉裏が赤々と燃え、コーヒーのいい香りがする。そして、夫はコロちゃんに急かされ散歩に出る。私は囲炉裏の火で豆を煮、大鍋で出汁を作る、そして夏蜜柑のジャムづくり…。春の味、踏みそも作らなければ、一息していると訪問者が来る。予定があるということは幸せ。

・直売所の雛飾り

友人が直売所をやっている、石岡市の外れで駅からは遠い…。新鮮野菜を中心に、米や佃煮、お菓子、鉢植えや仏花を販売している。また、近所の支援者さんが様々な手作り品（お手玉・小物入れ・マフラー等々も置いてある）を安く販売している。数日前には準備中だったお雛さまが見事に飾られていた…。店に入ると壁には懐かしい子供の着物が、そして創作雛や段飾りのお雛様がいっぱい。我が家は、男の子だったので縁が無かった、今になって雛祭りを楽しんでいる。

・もう一度聴きたい

夜中の微睡…深夜ラジオから、イエペスが弾いているアランフェス協奏曲がこちよく、もう一度聴きたく、夫のCDコレクションを探すが見当たらない。そうだ、こういう時はパソコン（Youtube）

で聴けば…！ 何とか、アランフェス（イエペス演奏）を視聴出来た。パソコンのデビューは昨年夏、文章を考え文字を打つのも大変？毎日フェイスブックで、頭を悩ましていた。ウーン？ あゝだ、こゝだ…どうでもいいような事を。

それでも、パソコンの前に座ると、一人前の気分が？パソコンを扱う姿に憧れていたから。

・雛飾りに満足

ブログ「八郷の日々」の大ファン、最近投稿された雛飾りの写真を見て、生を見たい…。雛飾りの最終日迄あと2日しか…？ 今を逃すと来年まで見られない、慌てて訪問することに…。玄関を開けると直ぐに陶器のお雛さまが眼に入る、脇の飾り棚には小さな人形が沢山、紙で作られた江戸時代の雛人形も…。座敷に飾られた雛人形は、大正時代の物と戦後すぐの木目込み雛。どの人形も年に一度の晴れ舞台に、私を観てと言っている。大きな窓の正面に足尾山が…。暖炉には赤々とした炎が、猫ちゃんも、ワンちゃんも、座布団の上で、ノツタリと…充分に楽しめました。

・八郷案内

カメラマンのN氏から、南山崎の交差点で風景を撮影中（TVの仕事で北海道の富良野らしい映像）と連絡がある。この辺りは平かな丘陵地、畑が広がり富良野を彷彿させる。近くに「富良野」と言う、蕎麦やピザ、珈琲を提供しているログハウスの店がある。

久しぶりのN氏を「ブックカフェえんじゅ」に誘う。コーヒーの後、近辺（青柳）を案内、隣の茅葺屋根の古民家、此処は何度も映画のロケに使わ

れる、何年か前に賠償千恵子さんがロケに訪れた。田んぼが広がり、初夏には蛍が乱舞すると言う。周りに雑木林：田んぼ道を少し歩いて行くと木崎邸（長く観光で案内される）：どつしりとした茅葺屋根（筑波流）が美しい。よく手入れされ庭に、古木の梅花が見ごろだった。

・クラフト展

フラワーパークで、クラフト作家による展示販売へいしかの里山クラフト展が開催。普段は車で一杯の駐車場に、テントがたくさんが並んでいた。筑波在住の義妹と初日に参加する、陶器、木工、ガラス、皮、竹、金属・・・アクセサリーや着物リメイク、たくさんの作品が…。其々のテントを覗き品定め、各作家とのお喋りも楽しかった。新潟からの作家は、3日間も車中泊。「慣れています」と言っていた。義妹は気に入った陶器のピッチャを…。私は大島紬リメイクの小物を（袖で作られたネックレスには、ソロバン玉が）あまりの可愛さに、思わず買ってしまう！

・長年の夢

朝から冷たい雨がチラつく、ドンよりとした天気。頭が重く体もダルく、グダグダを決め込んでいると、突然の来客があり茶のみ話しを…。其処にお隣さんが回覧板を届けに、玄関先でまたまた立ち話し…。すでに昼過ぎ、いつの間にか頭もスッキリしたので、散歩に出掛ける。

庭には春の花が咲き始め、水仙・クロッカス・クリスマスローズ。梅は満開、木瓜の花も咲き始めた。今年こそ、長年の夢のお花畑を…。

・クラフトの師匠

昨年までエコクラフトを習っていたOさんに、助け舟を急遽要請…。数時間の指導で思い出し（鑑編を無事解決をする。お茶の時間に《ミカンとリゴのドライフルーツ》を出す。この菓子は、茨城県出身の作家「折原みと」（漫画や小説で人気）が作ったもの。彼女は「ブックカフェえんじゅ」オーナーのKさんの妹。ドライフルーツは香りも良く、美味しかったので買い求め、大事に飾っておいた。お菓子とお茶、そしてお話しを、楽しい時間はアツと言う間に過ぎる。我が家のエコクラフト会のため、お返しをしなくては…！

・こんこんギャラリー

しばたあきこ絵画展（『可否時間』『アレ？』この絵、何処で見たのかな…）そうだ！先日イベントで見た絵だ！大きなスクリーンに映されたメルヘンチックな絵、歌とピアノを背景に…？誰が描いた絵かな？ズット気になっていた。「この絵だ！」彼女に聞いてみると、演奏していたリイさんから、詩に合った画を依頼されたとか。気に入った絵に再会できビックリ。絵に囲まれて飲んだ珈琲、杉の木で作られたカップ…絵も珈琲も器もみんな美味しかった。

・飾り棚

八郷は木工製作のメッカ…？そして、多くの素人が木工細工を楽しんでいる。夫も数年前から、木工（子どもの工作程度）に凝っている。諸々の道具も揃ってきた、時間が出来たお蔭で、ハウス（作業所）の整理も進んだようだ？終活整理中…小物を飾る棚が、どうも気に入らない。奥行のある棚

はあるが、と夫に話しをしたら、任せろ。暫くハウスの中でトントントン。出来上がり、壁に設置！出来はまあまあ、でも和紙の模様が目立ち過ぎている、しばらくはいいか？

・コロちゃん活躍

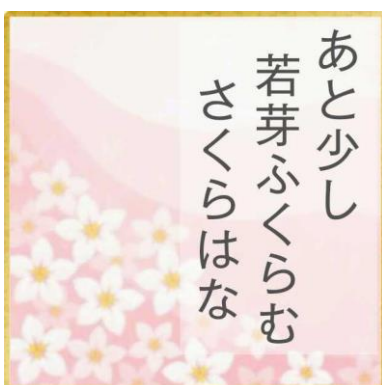
我が家に転がり込んで16年。コロちゃんは既に老犬。それでも必死に家を守り「もう朝だよ！」「散歩の時間だよ！」「知らない人が来たよ！」「欠かさず役割を果たしている。何よりも一番は私たちを、癒し和ませてくれる。そんなコロちゃんの仕事の一つ増えた？夫の自転車に付き合うことが、隣り地区にある山崎の交差点まで…。その光景は、巷での噂になっている様だ。老体に鞭打って、主人の介護、苦勞様！

《風の呟き》

風と戯れて

木下明男

・待ち遠しい
寒さ暖かさのせめぎ合い まもなく決着が…。



・春よこい
もう桜の時期なのに 田や畑には霜が…。



・庭いじり
うらかな日 土いじりをしていると



カエル飛び出し驚く。

常陸丸のこと

打田昇三

平和国家を標榜する日本国民として戦争を肯定する意図は無いが、歴史的事実なので内容を其の俚に書いている。不適切な表現が有れば御寛容を頂きたく、最初にお願ひしておく。

「稀勢の里」の活躍と横綱昇進で茨城県内が湧き返っているけれども本来、茨城県は大相撲と密接な関係にあった…と言うよりも、現代では余り知られていないが、大相撲の近代化は明治時代に茨城県出身の力士によって成し遂げられたのであると思う。百科辞典には「常陸山谷右衛門」と言う名力士のことが記載されている。此の人は水戸出身の横綱（第十九代）で両国国技館の建設と大相撲の近代化に貢献したとされる。

常陸山は、稀勢の里と同じ年頃（中学三年）の時に当時の出羽の海部屋に入門して、明治三十六年（一九〇三）六月には富山県出身の二代目・梅ヶ谷と共に横綱免許を得た。ラジオもテレビも無い時代だが、常陸山と梅ヶ谷という両横綱の対戦が全国的な熱狂を呼び、其れが大相撲常設館として両国・国技館の建設に繋がったと言われる。

話は変わって、常陸山が横綱になる数年前に長崎の造船所では六千トンを超える大型貨客船が建造された。当時は世界に誇示できる造船能力を日本が持つっており、其の技術を結集して造られた此の船は「常陸丸」と命名された。勝手な推測だが当時、破竹の勢いで勝ち進んでいた大相撲期待の星・常陸山にあやかっただけで命名されたのだと思う。

大型船を建造する目的は大量輸送である。日本は島国であるから仕方は無いが、明治中期から昭和二十年八月迄に大日本帝国を経営していた連中

は日本列島と言う自分の土俵を使わずに表現は悪いが「他人の俵（ふんどし）で相撲をとる」様な感覚で大陸や太平洋地域、南方諸島などでの戦争だけを考えていたらしい。都合の悪いことは何でも神頼みで済ませられると錯覚していた。

明治三十七年二月六日、前後の事情は不明だが、大日本帝国は大国ロシアに対し最後通告をしたが其の三日後に、朝鮮半島仁川港外に居たロシアの軍艦二隻を撃沈してから翌日に宣戦布告をした。日露戦争と言っても主な戦場は中国大陸と朝鮮半島であるから日本軍は現地に行く。大型輸送船の常陸丸も軍の御用船としてフル稼働で兵員や武器弾薬・食糧・軍需品などの輸送に従事していた。

明治三十七年六月十四日、常陸丸は軍の基地に指定されていた広島・宇品港から何度目かの輸送業務で大陸に向けて出港した。船員は百二十人居たが船長及び機関長、一等運転士はイギリス人である。日本の船員は大型船に習熟して居なかったのである。乗船客は戦場に向かう千九百十六人の軍人と三百余頭の馬であるが、馬も希望はしないのに「軍馬」として強制連行されたのである。軍人は「近衛後備連隊」で連隊長は須知源次郎中佐である。通常ならば戦地に行く部隊ではない。日本軍は余程の兵力不足だったらしい。

当日の海は平穏であつたが空は曇っている上に濃霧が立ち込めて周囲の展望が効かない。常陸丸が関門海峡を抜け白島を左舷に見て響灘に入った頃に砲声が聞こえた。日本から其れ程も離れて居ない海上であるから、誰もが日本艦隊の演習であろうと思ひ込んでいたのだが、実は是がロシアの軍艦クロンボイとリュウリックに依つて常陸丸の僚船である和泉丸が砲撃撃沈される音だった。

先に言って置くと、日本海を挟んで向こう側の大陸に在るロシアと戦うのであるから海上が戦場になり、船舶輸送が兵站の大動脈になることは小生でも分かるのに明治天皇以下、当時の軍部は元より政治家、国会議員、官僚など誰も「輸送安全の対策」を講じて置かなかったことになる。

常陸丸の一同が何かを考える暇も無く、和泉丸を沈めたロシア艦二隻が接近して来た。護衛の艦船も無く輸送船には武器が無い。船長以下が選ぶ方法は逃げるしかないのだが大型輸送船と戦艦とは速度が違う。ロシア艦は卑怯にも停止信号を出すと同時に砲撃をして来た。常陸丸は貫通した砲弾で機関部を破壊されて動けなくなった。

続く砲撃で被弾数は五、六十発に達したらしい。是により乗船していた多くの兵が倒れたが二百名程の兵は海中に飛び込んだ。其れに対してロシア艦が接近して射撃を行った為に乗船者の多くが犠牲になったのである。連隊長・須知中佐は敵の砲撃が続く中で生存者を集め最後の別れを述べた。既に多くの者が死亡している。連隊旗が船上で焼かれ何名かの将校は割腹自殺を遂げた。

船長は英国人ながら船と運命を共にしたけれども、海中に飛び込んだ者のうち五十三名は偶然に浮いて来た大型ボートに取り付いて漂流中に六月十六日早朝、敵艦から逃れた佐渡丸に救助され、其れによつて常陸丸の最後が明らかになった。

日本海海戦で東郷元帥がロシア艦隊を壊滅させるのは翌年の五月である。此の時に一隻だけ逃がれた巡洋艦が今でもサンクトペテルブルグ港(旧レニングラード)に停泊している。日露戦争(日本海海戦)の敗戦を忘れない為と言われるが、常陸丸の事件など誰も忘れていない日本とは大違いである。どち

らが良いのか：答えは難しい。

アポトーシス(細胞の自爆死) 菅原茂美

「がん」に関する文献は、読めば読むほど混迷。分子生物学の生噛りぐらいでは、とても理解できない。一応、簡単に纏めると、「癌」は上皮由来の悪性腫瘍で、「がん」は「がん一般」をさす。英語では Cancer。日本では毎年26万人のがん新患者が出るという。

人体は60兆個の細胞からなり、その数を維持するために、老化して死亡する細胞数と、生まれ代わる細胞数を一定に保つようコントロールされている。体に良くない生活習慣(肉食、塩分過剰、喫煙、飲酒、高血糖などは、細胞に大きなストレスとなり、DNAを傷付ける。するとP53という遺伝子(がん抑制遺伝子)等が変異を起こし、細胞の増殖をコントロールできなくなる。P53は、傷ついたDNAの修復や、細胞増殖停止などの重要な機能を持つ。ヒトとほぼ同じ寿命の象に、がんが少ないのは、このp53が人の19倍も存在するからとも言われる。

さて「アポトーシス」とは、ギリシャ語で、枯葉が木から落ちる事を意味する。即ち多細胞生物が、個体をよりよい状態に保つための「プログラム化された細胞死」の事である。例えば脊椎動物である人類も、先祖を辿れば、魚類↓両生類↓爬虫類↓哺乳類↓霊長類↓ホモ・サピエンス：という事になるが、魚類のヒレが変化して人の指になった訳なので、魚類時代の名残として、胎児の時には指の間に水かきがある。しかし陸に上がれば

水かきは不要。そこでその水かきの細胞には、発生過程で、自殺がプログラム化されている。オタマジャクシが蛙に変態する時も、尾の細胞は自爆死を命じられて、尾はなくなる。

我々の体内では、活性酸素や発がん物質などにより、健康な細胞は毎日のように大きなストレスを受けている。そのため細胞の遺伝子が傷つけられ、健康な人でも毎日数千個の細胞が遺伝子変異を起こしているが、通常は人の免疫機能により、異常細胞は自爆死(アポトーシス)を強いられ、除去(自然治癒)される。

一方、がんは誰でも、数十年も前から体内で生まれては消され、それを繰り返すうちに、抑制が効かなくなるとがん化する。老化した細胞が若い細胞に置き換わるのを促進する作用と、過剰に分裂しないように、コントロールする作用とがバランスよければ健康を維持できるが、細胞分裂を促進する作用が圧倒的に勢力を増せば、がんになる。しかし、もし細胞ががんになっても、若い人では素早くそれを免疫機能が見つけ出し、異常細胞に自殺命令が下され、発病には至らない。だが老化して免疫機能が低下してくると、頑固ながん細胞は、その自殺命令に従わなくなる。その勢いが非常に強くなれば、「がん」が発生する。

以上のように、がんは極めて複雑で、偶発的なものもあるが、遺伝的に明確ながん種もある。大部分は、生活習慣などからくる「細胞のストレス」が原因となる例が多いようだ。喫煙と肉の消費量が、肺がんと大腸がんの発生率とに高い相関を持つと言われる。

私の場合、両親や兄弟がいずれもがんで亡くなっているのに、生活習慣には、非常に気を付けて

いたが、度重ねてがん(3種)になった心当たりは、今思えば、絶対にタバコを吸った経験がないのに、更に酒もそれほど飲んだ覚えがないのに、若い時に随分と雀荘に入り浸りで、副流煙による受動喫煙が大きな原因かと、今更ながら悔やまれる。しかし、現在は、人間ドックなど、マメに検査を受け、早期発見・早期治療をすれば、完治とはいかなくとも、かなり健全な生活はできるものと確信している。それに加え、何事も前向きな姿勢と気力。そういう心棒が固定していれば、病氣の方が尻尾を巻いて逃げていく…と信じている。

細胞の分裂回数能力からみれば、ヒトの寿命は120歳までは可能と言われる。いわゆる「大還暦」である。実際ロシアの婦人が122歳まで生きた世界記録がある。それを人類は水や空気を平気で汚す、軽薄な文明により、良からぬ生活習慣の多用で、細胞に多くのストレスをかけ、無理に寿命を縮めている。地球温暖化防止対策として、私は全世界の人々が「衣食住の簡素化(経費10%削減)」の推進を挙げているが、それは即ち、がん予防にも繋がる「定石」とも言えるのではなからうか。

【特別企画】

打田昇三の私本・平家物語

巻第六 (一・二)

葵前(あおいのまえ)のこと

「源氏物語」で光源氏と政略結婚をさせられた左大臣の一人娘を「葵の上」と言った。其の女性と此

処で登場する葵前とは血縁関係が無いようであるけれども、どちらの「葵」も不幸である。

此の章段の書き出し(原本)が「中にも哀れなりし御事は…」となつてゐるから余程、哀れなのであるうけれども、庶民とは違つて生活苦では無く男女間の恋の苦勞であるから「勝手にしろ！」と放つて置けば良いのだが…。

前の章段に登場した中宮に仕える女官が居て、その女官に召し使われる少女が有つた。階級的身分が低かつたから名前は「少女A」でも良いのだが、思い掛けなく高倉天皇が此の少女を気に入られて寵愛を受けることになった。心優しい天皇は少女の主である女官にも氣を使われていた。

古い時代の、上品な流行歌のような「謡詠」に「女児を生んでも落胆することは無い。男児を生んでも大喜びすることは無い。男性は諸侯(二国一城の主に封じられることも難しいが、女性には(機会があれば妃にもなれる…)と言ふのがあり、少女Aも「此の人はやがて女御(第二皇女)或いは皇后と呼ばれるようになるであらう…」と噂されて名も葵の前と称した。無責任な周りの者は、勝手に「葵女御」と呼んだりしていたのだが、此の事を聞かれた高倉天皇は葵の前を遠ざけるようにされた。平清盛への氣遣いであり、世評への配慮もされたのである。

其れにより天皇が何と無く氣落ちしたように見えたので、関白の藤原基房が「御氣の毒なことである」とと宮中に行つて「天皇が誰に遠慮をする必要が有りますか、どうか葵の前を召し出されますように…」もし葵の前の身分に問題が有るならば、私の養女と致しましょう」と申し上げた。すると天皇は「それはどうであらうか?退位してからならば前例も有るうけれども、在位中に其の様なことをすれば、後の世

に非難されるであらう…」と言われた。関白・基房も天皇の心中を察して涙ながらに御前を退出したのである。其の後、天皇は風情のある緑色の薄紙に古歌を書き止められた。

「しのぶれど色に出にけり我が恋は

ものや思ふと人の問ふまで」

話が逸れるけれども此の歌の作者(平兼盛)は、良妻賢母の歌人として知られる赤染衛門の父親で第五十八代・光孝天皇の玄孫に当る。

高倉天皇は、此の書を近臣の冷泉少将隆房(れいぜいしようしょう)に清盛の娘を妻とした。藤原氏に渡して、葵の前に届けるように命じられた。天皇の書を見た葵の前は感情を抑え切れず古歌の様に顔に現わし「氣分が悪くなりました…」と言つて里に戻り五、六日は病床に在つたけれども其の俛で亡くなつてしまった。氣の毒だが「主君の一日の(短い期間の)恩を受けた為に妾が百年の身を誤まつ」と言ふのは此の様なことで有ろう、と人々は噂した。また、中国の唐時代(西暦六百年代)に編纂された「貞観政要(じょうがんせいよう)」には、唐の太宗が貞仁機と言ふ家臣の娘を宮殿に迎えようとした際に魏徴(ぎちよう)と言ふ重臣が「彼の娘には既に陸士という婚約者が居ます」と忠告したので、太宗が思い留まつた話が載つてゐる。葵の前に対する高倉天皇の心は太宗の決断に違わぬ悲痛なものであつた。

小督(ことく)のこと

前章段に引き続き高倉天皇の恋愛話であるから飛ばしても良いところだが、此の章段では平清盛が本当に底意地の悪い苛めを繰り返しているようなので、

人間の業を見せ付ける話になっている。清盛にしてみれば自分の娘が中宮（准皇后）に上がっているのであるから、天皇の側室に関しては排他的又は否定的になるのも止むを得ないところであるが、度が過ぎる。

しかし此の場合は葵の前を失って落胆する天皇を慰めようとして中宮（徳子）が或る女性を推薦するのであるから不思議な世界である。推薦された、と言うか、犠牲になったのは既に宮中に勤務していた小督という女房である。此の人は平治の乱で殺害された藤原通憲（信西）の孫娘に当り、父親は中納言の藤原成範であった。限定された範囲ながら宮中一の美人と噂されており、琴の名手とも称されていた。その女性が清盛に狙われた。

前章段で葵の前に手紙を届けた藤原隆房は冷泉大納言と呼ばれたが未だ少将であった頃に、此の女房を見染めて歌を詠み恋文を送り、盛んに言い寄ったけれども相手にして貰えなかった。それでも挫けずにストーリーを繰り返して、やっと交際が出来るようになったのだが、それが今回のことで引き離されるようになり、隆房も相手が天皇では諦めるほかは無。未練たらしく宮中でも女房の居る部屋の近辺をウロウロしていた。小督のほうは立派と言うか諦めが良くて「私は天皇に召されたのですから、近寄らないで下さい！」と手紙もメールも呉れなくなつた。それでも隆房は万が一にもと希望を掛けて下手な歌を詠み隙を見て小督の居る部屋に投げ込んだのである。其の歌は、

「思ひかね心は空にみちのくの

千賀の塩釜近き甲斐なし」

という。

小督は返事を送らなくては悪いと思ったのだが天

皇の手前も有るし人目もあるので、それを未成年の召使に命じて中庭に捨てさせた。隆房は返事かと思つて回収した手紙が着信拒否であつたから

「玉づさ（手紙）を今は手にだに取らじとや

さこそ心に思ひ捨つとも」

— 近くに居ながら此の世で逢うことも出来ないのであれば生きている甲斐が無いので死を願うばかりである—と心に決めた。

此処までの経緯ならば隆房の一人相撲で話が決着するのであるが、実は「平家物語」巻第一「吾身榮華のこと」で触れたように藤原隆房の正室は平清盛の四女であつたから、どうしても良いような此の章段が必要以上に長くなり、其の分だけ平清盛の悪い評判が増えてしまったのである。誰が知らせるとも無く宮中のゴシップのような此の話が広まり、やがて平清盛の耳に入った。清盛は間もなく死ぬのであるから、現役の者たちの恋愛事件に首を突っ込んでいる暇は無いのだが、自分が軽視された様な気もして自分流の判断をしたために問題が大きくなつた。それにしても国民は飢えていたのに、宮中と言う別世界は男女の色恋沙汰で暮れており日本にも不条理な時代が有つた。

小督の噂を聞いた平清盛は、国家の頂点に立つ前太政大臣という立場を忘れて、一介の頑固爺になつて考えた。中宮（徳子）は娘であり、また冷泉大納言は婿である。つまり高倉天皇と冷泉隆房と言う二人の娘婿が小督と言う女性に取られたことになる。小督が居る限りは娘たちの夫婦仲が上手くいかない。これは小督を呼び寄せて何とかしなければなるまい！原文には「召し出して失わん…」とあるから暗殺も考えたと思われる。恐ろしい事だが此の事が小督の耳に入ったから「自分のことはどうでも天皇の

為に心苦しい」と密かに宮中を離れ行方を晦ましたのである。

清盛は満足したけれども、高倉天皇の驚きと悲嘆が大きかった。政務どころでは無く昼間から寝所に籠つて涙に暮れ、夜は夜で南殿に出ては夜空を眺めて嘆き通すという有り様であつた。此の状態は清盛にも報告されたのだが、さすがに大物だけあつて清盛は天皇の悲しみを理解しようなどとは全く思わ無い。「天皇は、小督が居なくなつて悲しいのであろう。それならば…」と更に意固地な爺さんになつて、天皇が困るように宮中で奉仕する女官や宮中に参内する公家たちを天皇から遠ざけたのである。是が日本に於ける「イジメ」の元祖かも知れないが情けない話である。

その様な状態で「八月十日になつた」と原本にある。高倉天皇の追憶なので年代が少し遡っているため「新院崩御」が養和元年（一一八二）のことであるから、この話の八月十日は治承三年（一一七九）以前の出来事になる。其の夜は雲一つない夜空であつたが高倉天皇は小督を失つた悲しみから涙目で月を見ていた。暫くして「誰か居らぬか」と声を掛けたが、清盛の「天皇いじめ」で誰も返事をしない。其の時に宇多源氏の弾正少弼仲国（だんじょうしゅうひつなかくに）現代ならば検察庁の高官、当時は有名無実の職になっていたが宿直に上がつていて、天皇から離れた位置に居たのだが、これを天皇が見つけて「近くに参れ」と呼び寄せられた。何事かと畏れながら近づくと天皇は「其の方は小督の行方を知っているか？」と聞かれた。仲国は慌てて「どうして私が知りましょうか…」と答える。当然のことである。

天皇は「本当に知らないか！」と念を押してから「小督は嵯峨の辺りの片扉の有る屋敷に居ると言う

情報が有る。家の持ち主の名は分からないのだが探して参れ！」と命じられた。仲国は「家の持ち主の名が分からないのに、どうやって調べれば良いのでしょうか…」とため息をついた。天皇も「それもそうだ…」と妙なところで感心してから涙を流された。仲国は気の毒になつて「そう言えば小督殿は琴を弾かれる。御所内で演奏された時に私も笛の役を拝命した事が有るから、その琴の音（演奏の腕前）は聞き知つてゐる。嵯峨辺りの家々を回つて見れば何か情報を得られるかも知れない」と思い付き「琴の音を頼りに探してみましよう。しかし天皇の御意思を示す証拠が無いと信用して貰えません。どうか御書面を賜りますように…」と申し出た。高倉天皇も希望が湧いてきたので小督宛ての書状を書き、さらに「馬寮の馬に乗つて行け」と言われた。つまり天皇の私用だが公用車を使わせて貰つたのである。仲国は宿直勤務を放棄して直ちに小督探しに出発した。

原文には「そことも知らずあこがれ行く」当ても無いのに出て行つた」と書いてあるが、高倉天皇との会話で嵯峨野辺りと見当がついたのであるから、源仲国は取り敢えず何人かの供を連れて嵯峨野へ向かつたのである。平清盛の父親・忠盛が出世街道に足を踏み入れる頃に活躍した歌人で藤原基俊という者が居り、その歌に「雄鹿鳴く此の山里の嵯峨なれば悲しかりける秋の夕暮」と詠んだ歌があるが、嵯峨野の秋は他の場所の秋景色よりも物悲しく思えるのである。

仲国は、取り敢えず高倉天皇の情報に頼つて嵯峨野で片折り戸の家を探しては聞き回つたのだが手掛かりは掴つかめなかつた。嵯峨野にはお堂なども多い。有名な釈迦堂を始め小さな堂舎も残らずチェックしたけれども空振りであつた。

何の手掛かりも掴めずに戻るの**は来ない**よりも悪いことになるので、其の俣で何処かへ逃げてしまおうとも思ったが、日本国内では天皇の命令で探されたならば身を隠す場所が無い。あれこれと考えながら行く当てもなく日暮れの里で馬を進めている中に嵐山に在る法輪寺の近くに來た。勝手な想像をして、もしや小督殿が法輪寺に來ることも有るか其の方向に向かつて行つたのである。すると、小倉山の東南にある天龍寺の後方に亀の形をした小さな山があり「亀山」と呼ばれていたのだが、其処の松の木が茂つた辺りから微かに琴の音が聞こえたような気がした。

西暦千年代の初めに右大臣の藤原兼家（道長の父）に騙されて退位させられた花山法皇の選とも言われる「拾遺和歌集」に「琴の音に峰の松原かよふ（通う）らし何れの緒より調べ染めけむ（斎宮女御）」という歌がある。その琴の音が小督の演奏かどうかは**はつきりしなかつた**けれども、仲国は必死の思いで馬を急がせ、琴の音に近づいて行つた。其処には情報通りの片折り戸の家が有り、洩れ來る琴の音に近づいて耳を澄ませば曲は妻が夫を想つて奏でるといふ「想夫恋（そうふれん）」である。小督殿は天皇のことを偲んで多くの曲の中から此の曲を弾いて居られたのであろう。思わず感動して仲国も腰に差していた横笛を抜き出し（宿直勤務中に急に命令されて出て來たのに横笛を持つてゐるのは不自然にも思えるが）少し音を出してから門を叩いた。

琴の音が止んだので仲国は声を大きくして「内裏から源仲国が使者として参上しました。門を開かせ給え…」と申し入れた。是に答えは無く、少し経つて中から人の出てくるような氣配があり年齢も幼げで小柄な女房が顔だけで出して「間違いでしょう

…此の家には内裏からお使いを賜るような者は居りません！」と言う。ここで半端な説明をして門を閉められたり、施錠されたりしても面倒なので、仲国は強引に扉を開けて屋敷の中へ入り込んでしまつた。開き戸の側の縁に座つた仲国は形を改め「どうして斯様な場所に隠れてお居でなのですか、高倉天皇は貴方が宮中を出られてから悲しみにくれるばかりで、お命さえも心配な程なのです。私がいい加減なことを申し上げると疑われるのは残念ですから、証拠として天皇から御書を頂いて参りました…」と言

つて高倉天皇が綿々と綴られたラブレター（其の時代には別な呼び名が有つた）を出して取次の女房に渡した。女房から受け取つた天皇の手紙を見て本物だと分かつた小督殿は驚きながらも感激して、直ぐに机に向かい高倉天皇への返書を書いて結び封をし、それに添えて仲国への引き出物として女性用の衣装を与えた。女物より男物が欲しいと仲国は思つたかも知れないが、当時は女物を与える習慣であつたらしい。

仲国は、其の衣装を肩に掛けて歌舞伎役者のような身構えで言つた。「他の用事の使いであれば返書を頂いて済むのですが、日頃、内裏で御琴を演奏される時に、此の仲国が笛の役を仰せつかつていたことをお忘れですか（天皇も、其の為に仲国を使者とされたのです）」小督殿から直に御返事を頂かずに戻ることは出来ません…」

その言葉に小督も尤もであると思ひ「貴方も聞いていることですが、入道相国（清盛）が私の存在について恐ろしいことを言っているというので、何を考える暇も無く内裏を逃げ出してしまひ、取り敢えずは此処に匿かくまつて貰つて、明日には大原の奥に住もうと思つて居り仮住まいですから琴などを弾くことは無いのですが、主の女性が今宵は名残

が惜しい、と言うので琴の音を怪しむ者も居ないであらうと納得して、つい琴を手にしてしまいました」と涙ながらに答えた。

大原に行く、というのは俗世を捨てて尼になる覚悟なのである。仲国も思わず貰い泣きをしたのだが、気を取り直して小督を諭すように言った。

「明日は大原へ移られると言うが、髪を切つて尼になる、などということは決して有つてはなりません。その様なことをして天皇が、どれ程に悲しまれるかを考えて下さい」小督に言い渡してから連れて来た者たち（出発時に天皇の指示で付けられた役所の下級武士など）を、其の家に残して厳重に警護させ、自分は公用車（馬）を飛ばして内裏へ戻つて来た。既に夜明けの時刻であつた。

時刻が時刻なので天皇は既に床について居られるであらうから、誰かに取り次ぎをして貰わねばならないが、下手な奴だと平家に情報漏れる。仲国は馬を繋ぎ、小督から貰った衣装を宮殿の西の渡殿に置かれた衝立に掛けて、取り敢えず南殿に向かつてみると高倉天皇は未だ御座所に居た。

真夜中であるから寝れば良いのに、労働をしない天皇は未だ起きて居て「南に翔（かけ）、北に嚮（む）かこ、寒雲を秋の雁に付け難し、東に出西に流れ、只瞻望（せんぼう）を曉の月に寄す」と「和漢朗詠集」と言う本にある様な心境で空を眺めていた。周りには誰も居ない。

仲国は其処に寄つて小督の返事を伝えたところ天皇は感激されて「今直ぐに連れて来るように！」仰せになった。天皇は簡単に言うけれども情報が平清盛に洩れたら恐ろしい。しかし天皇の命令は「綸言汗の如し」と言つて取り消すことが出来ないから、仲国は真夜中にも関わらず関係官庁に指示して出迎

えの車両及び必要な人員を集め嵯峨に向かった。勿論、小督は拒否したが仲国が何とか説得をして宮中に連れ帰り、高倉天皇は人目に付かないように隠して置いて寵愛された。

原本に「姫宮一所（ひと）出来させ給ひけり。此の姫宮と申すは坊門の女院の御事なり」とある。範子内親王で治承元年（一一七〇）十一月誕生とされている。坊門の女院は賀茂神社の斎院（神職として出された皇族の女性を務め、土御門天皇の準母とされた女性である。生まれた子は天皇の子であるから清盛も勝手には出来ないが平家では無い母親は目の敵にされて、結局は「小督が行方不明と言うのは嘘であつた！」と腹を立てて治承三年に清盛に捕らえられ尼にされてしまった。

平家物語の本文は小督が平清盛に受けたイジメの記録が前後しているようで分り難いが、記録では治承三年に後白河法皇が幽閉され、多くの公家が無職された時に小督も二十三歳で高倉天皇から引き離された。（尼僧として嵯峨の辺りに住んでいた）病弱であつた高倉天皇は、其れが原因で病床に伏す身となり養和元年に亡くなつてしまった。原本には明言してないが、高倉天皇（上皇）は平清盛に殺された：ということになる。

一方、高倉天皇の父親である後白河法皇の嘆きは大きかった。繰り返しても愚痴になるだけだが永萬元年（一一六五）には息子の二条天皇を失い、安元二年（一一七〇）には孫である六条天皇を亡くした。そして「天に住まば比翼の鳥、地に住まば連理の枝とならん」と天の川の織り姫と彦星のように契を交わされた建春門院（高倉天皇生母）を安元二年の秋に失つた。年月は過ぎても別れは昨日今日のように思えて涙も尽きない所に治承四年五月には第二皇子の高倉

宮以仁王が討たれた。

そして現世・後世を頼みに思っていた高倉天皇にさえ先立たれてしまつて、どう仕様もない身はただ涙を流すだけの毎日であつた。：「悲しみの至つて悲しきは、老いて後、子に遅れたるより悲しきは無し。恨みの至つて恨めしきは、若くして親に先立つよりも恨めしきは無し」と学者で知られた大江朝綱が、子息の澄明に先立たれて書き残したことを、今こそ思い知らされたのである。

法皇が続けていた一乗妙典（法華経）の読誦も行われず真言密教の修行なども行われなかつた。高倉上皇の死により安德天皇が父母の喪に服する諒闇（りょうあん）に成り、公家たちも喪服に着替えたので、宮中が暗く沈んでいた。

（続く）

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ふるさと風の会 10+1年祭

(ふれあいの里 石岡 ひまわりの館)

2017年6月11日(日曜日) 10.00~17.00

ふるさと風の会は、会報「ふるさと風 132号」の刊行をもって、満11年となりました。ふるさと風の会11周年を記念して、ふれあいの里石岡・ひまわりの館にて、ふるさと風の会10+1年祭を開催いたします。記念祭では、月刊「ふるさと風」の活動実績としての「ふるさと風のバックナンバー展、文庫展」をはじめ、「ことば絵教室展」「御留川資料展」「劇団ことば座公演」「ふる里とは、物語の降る里をテーマとしたフリートーキング(予定)」を開催します。

ふるさと風の会主な文庫

- ・打田昇三
全集全6巻、歴史の嘘、私本平家物語、私本正門記…他
- ・兼平智恵子
石岡散歩、ふるさと風のことは…他
- ・伊東弓子…風の景
- ・小林幸枝…風の舞う
- ・菅原茂美…遙かなる旅路
- ・木村進
地域に眠る埋もれた歴史シリーズ(24巻)
石岡地方のふるさと昔話、茨城のちょっと面白い昔話…他
- ・白井啓治
朗読舞詩集「寒蝉」、霞ヶ浦の紅い鯨、随筆・風に吹かれて、皇帝ペンギンの首飾り、朗読「ふるさと物語」

ことば座「常世の国の恋物語百」第37話

「な(汝)は愛しきもの」

(開演 14:30) = 終演予定16:00 =

脚本:演出:朗読=白井啓治

手話舞=小林幸枝 オカリナ演奏=野口喜広

「なは愛しきもの」作詞・白井啓治、作曲・野口喜広の歌をモチーフに、恋瀬川の流に青春の思い出を笹舟に乗せて、希望を謳う。

名もない花はあり
ません
あなたが知らない
だけなのです
名もない花の愛し
さき
私が知らないだけ
なのです



白井啓治



野口喜広

小林幸枝 ※ことば座公演は有料(大人 600 円)となります。

ふるさと風の会会員募集中!!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659